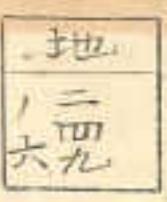


木名訛名石圖書

五



木曾路名所圖會卷之五

周易

○江府日本橋

○行德

野八
飼惱
駒

○ 八幡富士
○ 白井

神
壽

○番雨

王
奇

神社

鹿島

卷之三

鹿島神社

卷之三

卷之三

高天原

常陸帶

○極之

卷之三

應生

廣雅

土寺造



木曾路名所圖會卷之五目錄

釜ヶ原

五

ツラスル

富士の夕日れ

ク全さく

釜ヶ原駄の

駄のうら

新宿

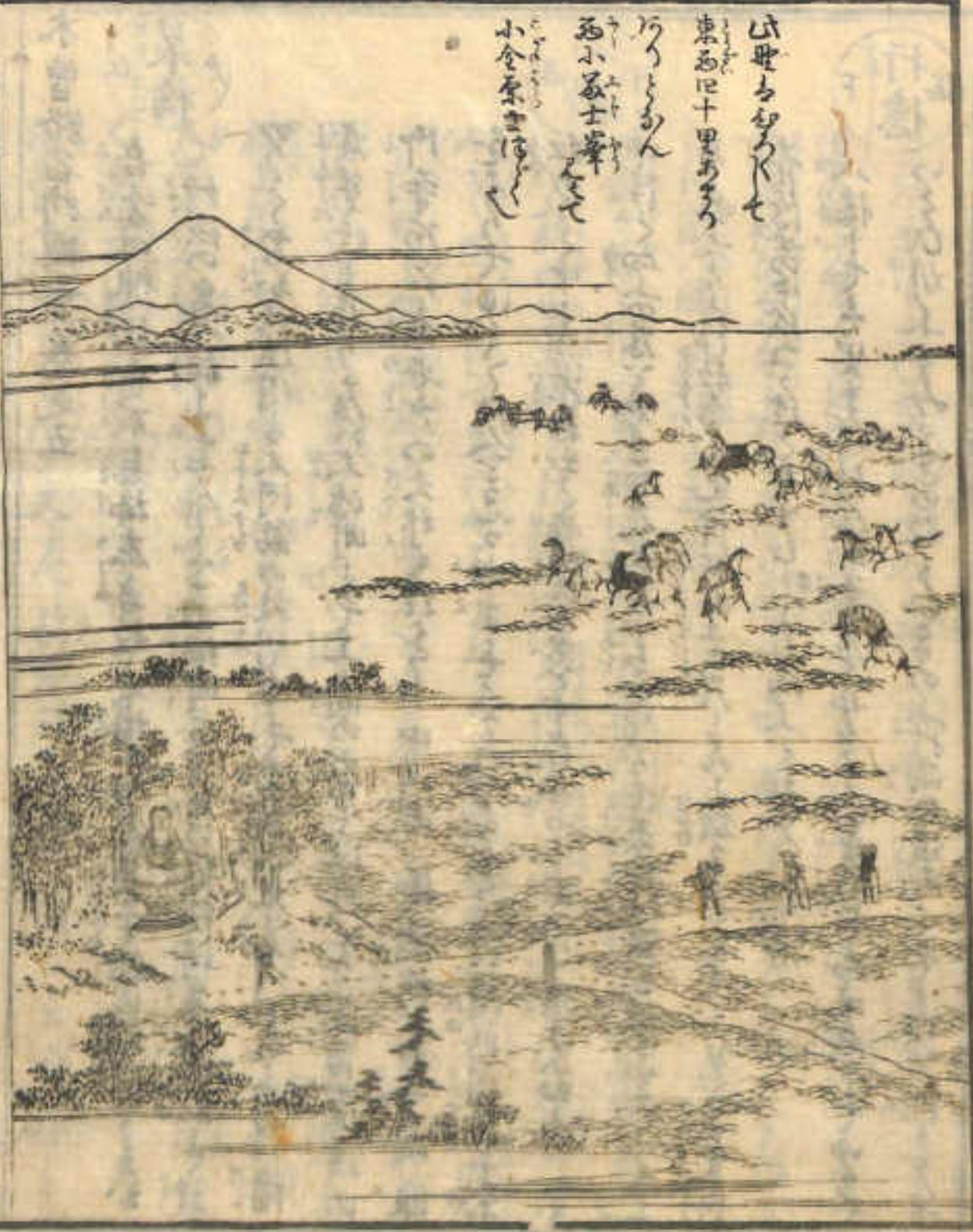
本居五一

山野ちやうべと
東あに十里まあさう

うとうとん

西小坂士革をと

小金原さはく



小金原さはく

西小坂士革をと

小金原さはく

西小坂士革をと

小金原さはく

西小坂士革をと

小金原さはく

木曾路名所圖會卷之五

日本橋

吾妻の神社香取息麻御前人清さんにて日辛宿の跡庵とある
て行旅の宿へ船よまんとす小網町二十日の近傍河岸よりおまき樓

つるく家あはには川も大河筋の枝川よりて名伏小名本川より上石へ諸

度年げしむり左へ太陽町にて工商の家くほ町より五百羅漢の

御寺のえ延妙戸の大井を經きて中川の御園所へ守尾眼

をもうりてゆきて水立をくわねまきすて漕外川筋の紫

虹ありと中より老翁出く鰐城賣糸とすむ急がしめの中唐まふせまへゆ

、ゆけくゆの風と見よが葉の志をまきうて葦のは葉も波下せれども名

易寺とくわひねももくとて只晴ふあはとみよ越すもくと夜笠内

大店屋の中ひづけとせすむとすみだへもすりいぬけ

八幡まで里まわり徳の茅店小坐とひま食のあらしてゆく

ひひりふまよとの歌くひきのよれ雨の道あくを道筋走らぐんで

本居宣武

行德

下情

足伏牛一の草鞋土牛へく柳よ御町をに生じて六日おひに生きて
道のやうに一木擅んぞり界隈をとくとて遠小都のやうな
願まよ向云をふたうひきのとくあたと雲ともあととつ
らん湖へ歸て一弱て霜ぬ

金ヶ若ナモ二里八町ば里の中ニ舊水坂井にて八幡宮をせ

路の神の生神とんは道よ東海道中とてとくらひ龍門の
くち道更にして馬行をもすれすれとての林荒あくね色はれり
みて折と坐て僧惠寺へあらめどゆる先を伏るくせりなまよあ
國城山のまほすとまとうとく早苗をあらがつの小川より阿久比
楊よ風よちと聲のうのももうもよしこ田舎れ野をとん拂を拂
とすまよとて座むのゆきを拂すとあをすとく雪ふゆ拂とと郭ムラ
くをと雪ふゆ拂とと御とさりとまよしと有拂うあはとくとく
とまよとくと拂とくと拂とくと拂とくと拂とくと拂とくと拂

とまよとくと拂とくと拂とくと拂とくと拂とくと拂とくと拂

金ヶ谷
總

東行ありの事と云ふ事小あて材町村の三里下田畠地より
白井まであるひて邑里は色く田中なりた小見と小見とく
田園隨くたりある耕りの事玉苗をさうて筆にさへてひす耕
きぬ行くをやうとたちがあゆ中和川の田金の種也不そく子民

穀穡の器一う田を水龍よりとも搾穀と復く夏の雨をうへて
えとがねと九種田を三枚下すいは秋も家店はぐくみて
林園寺一往く金ヶ谷で下所不至野つじ野と勝く下て葛竹
樹うて風吹落葉下小和田の約八百十石うち野事よがくねれ
手取あまて遊ぶる名とぞ一これ馬の馬と人畜よ生くわま
公宮の侍馬と馬寮の人あよ此廻一駿馬大抵も御てあうとま
鞭馬勢すば甚よも不仲とはまくと戦まるる事少くとも及
そが申本さりには多くの駒人を馬としや早く脇の方へ退をうけせ
おりあつると頼むべどすやれもや寧へりくらむ小和士室

あすすふ見やるに廢城をくづくらす入先をじりみてあねを
まし一せどもきの空を勝む斜脚をよ面今不近ほぎの日への御
白井と聞ふ

大森まで二里下請を民長殿よりて御とくとあすだ那室も西
三河うてひ立一そく中にとま焉形の御座して一氣流の内を
立く野なり林を通て大森にて前よりてはあらの隣へりま
れ今此地へきて家屋あてもあら農の茅庵もまくして
村の口下小坂あり

本風をぞ艾町又野を邑民家が通てこあり五井の麻をう
て穂ひをと農家がまくとみずかよ一風下と前もす
麻傍まで船宿十里下請を民長殿よりて前も又千
船の
船身へりあうてこせりお伏せにす所の船の橋筋も勝房ありそ
し私舍ふの家舟の名舟一木とけ赤サ草をうて之處の船を

本風
總

大森
總

白井
總



まく城の彼と向くて立て小今一色ぞたぬと土佐日記のもりけ小
さうしもく庵は恩恵を取る所へ行つてそぞもう疏波ふのびて
赴くより旅は船時ひひとて其とあねを舟からぬうこすを渠
を下り豆食を了めとて船を出ん少ぬうねを豆付くとてあ
夏のそば暑もに風あが、疏波のあゆー左右の木をねみへ草の風を
うづくふ風生えずふ真菰の風おだびくとて豆付をすゝむ
程も近く大河もつまを立つて船工娘とせば河とつむ名局のと向
あれ松匠營を參り船とて河とれ利根川とてみ源へ蘆競川とて
疏波川とても麻舎とて坂東をあととて坂東の北流とられべを多
く其首とよよあらし兩峯をあうふゆく夕陽あい傾葉は棹のみあま枝
浪ふよかくあらめあらめかけとども黑白をりたす白羽小たてふ波は
かあやも真砂地ふ浦とて平に渺くとて底日沈そぞう乾坤碑
もとて舟と一葉のやく舟と神縛とて前せりて

神寄

神鳴

水恵子

有りれば
く宮井
の周

下卷

卷之三

の駄食

卷一

卷之四

四
一

下
二

祭神惶根尊

卷之三

卷之三

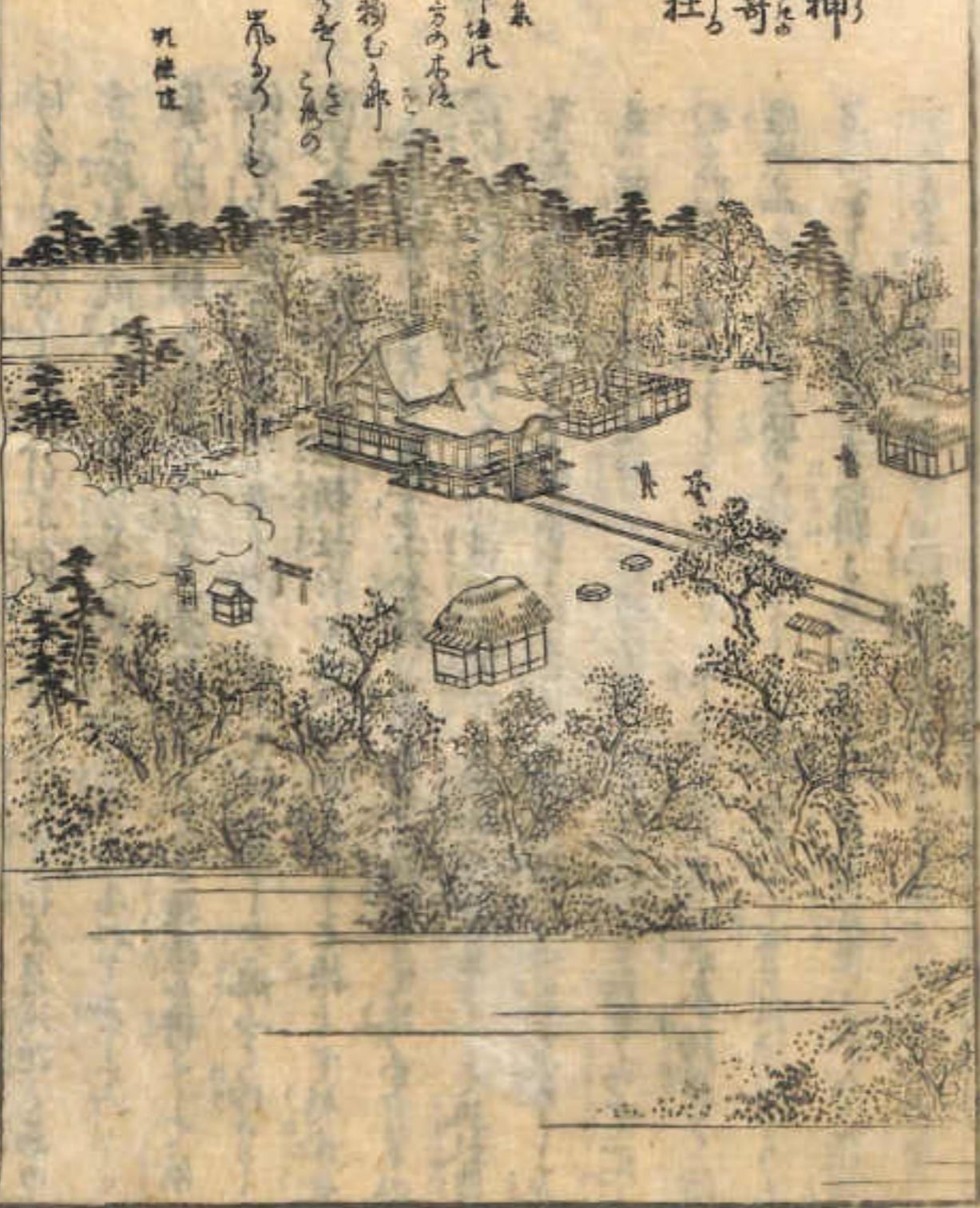
七

卷之三

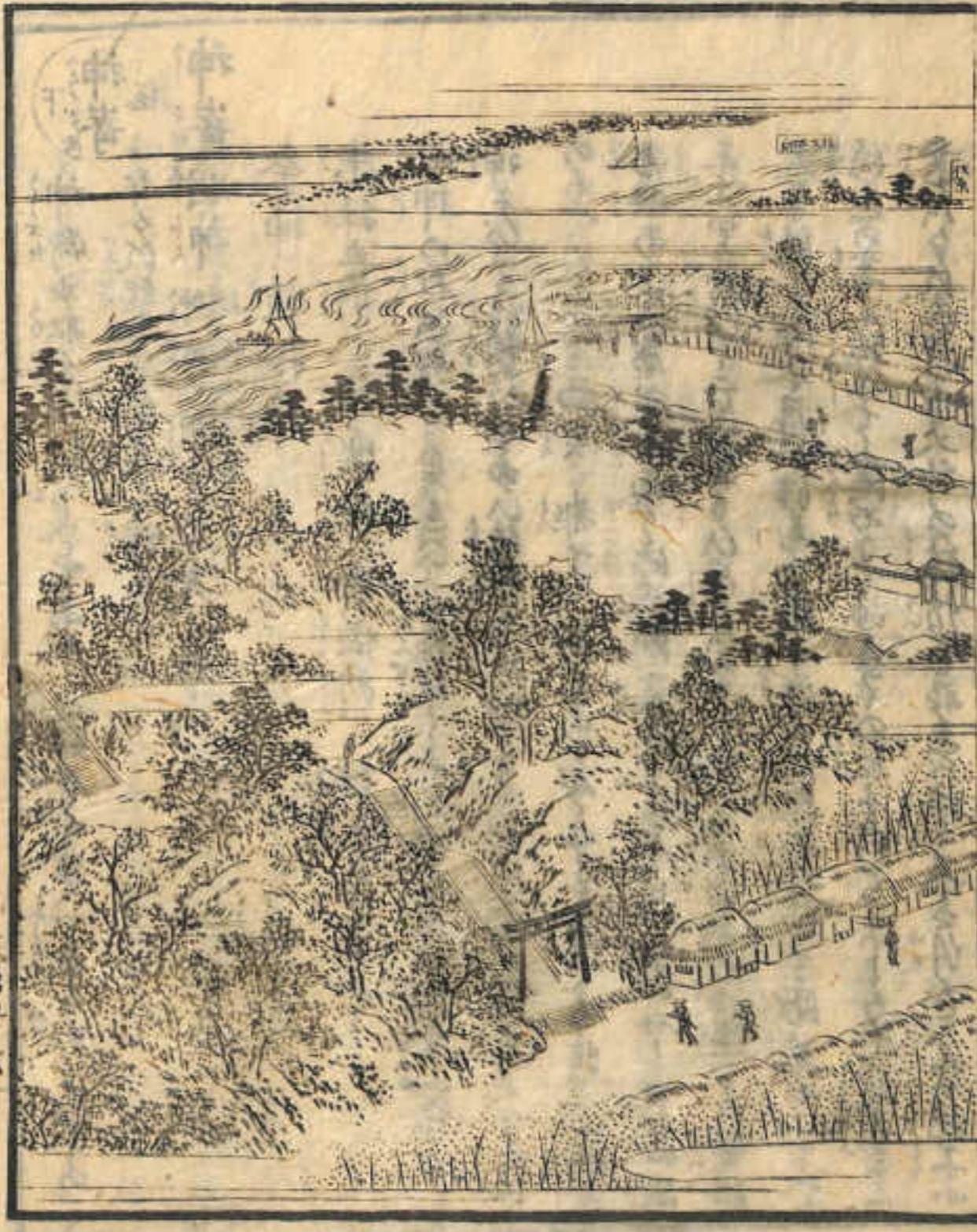
未社五前 神樂殿 滅供部 神本傳
此神の社は朝から奥までと森然として木林ありて無音の
神^ミ。ひる秋頭たゞをあら珠勝りてアラカモモをそよだらば宿うえ撃
つせり。川の福度く都て七八町もある。すみれ色とく跡とよ湖
の興あつて蘆葦生氣う鴻雁列昇に下つ。そ風氣のノトロ奴團
二千四百長に十六風の身の骨狀を手て草を吊るるに候。う駿浪
天を浸す潮水月子はまとく備千瀬の被摩都のぼう跡荒すにて
湯生のまゝ泥とて廢やうてゆきの記。ナリ。うふよりて文易え
業成さん。古神も又神の法。階を踏まばく不立所をう伏地工

社_ノ寄_ニ神_ノ

九德齋



本居宣一
六



ゆきせくゆくはひ方けり小自はく月が満のまねふ月が抱くあの方ふ袖まく風流うしてあを云が象うたる涙もあれど身うむすき義をゆくひ頭も基も立が冠う一葉の桜舟よすやで種はる梅うてはる漬の水清はるか櫻聲はるか岸へ秋風をはる處へと洞へくらうく漁父あつ半舟トテ輕精舎のたぐの旅船ふ三公もと換トモ想念をく芦のゆどきす高き小金舎と蘿く月を荷うてはるを育みぬ一杓の抹の外利名極く三人の違同天地や一揚柳の月高うして孤れ瘦薺花の風軽くやかうて雪がちに易林も輕舟も蘿も仲友を食へて慈ハ鶴を浴て曹公成學しし波浪遠く生く巨鱗を船をあそぼうが所生の魚笛をかじて歸りそび下まで彼の義小求る約羅く餘浪やあらう森舟底聲や妻声くして古今の萬物書うんばりうる月ふそへた不羈の体と只御よもぎひくりる桜雲のあれぞく涙篠側の岸ふるく竹の面うくらうて城取乃多在是夷國

香取

母のうつりあはれのほんぢぬ城下をまよひふ虫のあはれとて
ゆとりほくちやうねう腰ばかりあら小ちよそで船をゆきて深くうへて立家
ば倉ひ縮くまで遙くは伊豆幸か一四又里も行程不秀うりたる
居ふ着く

香取の浦外有は地下終の
えりやうくら
神社まで陸地十八町あり

日取浦

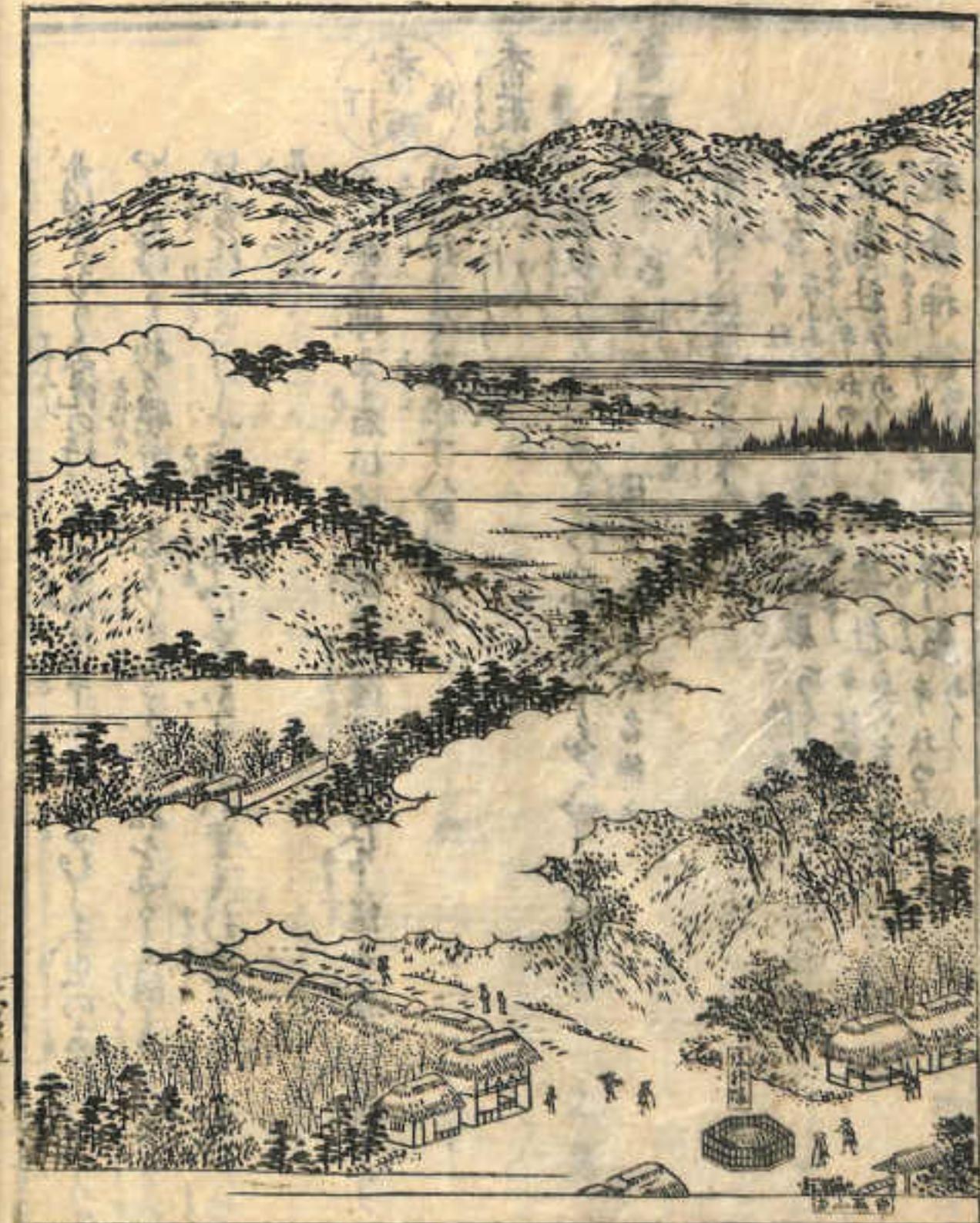
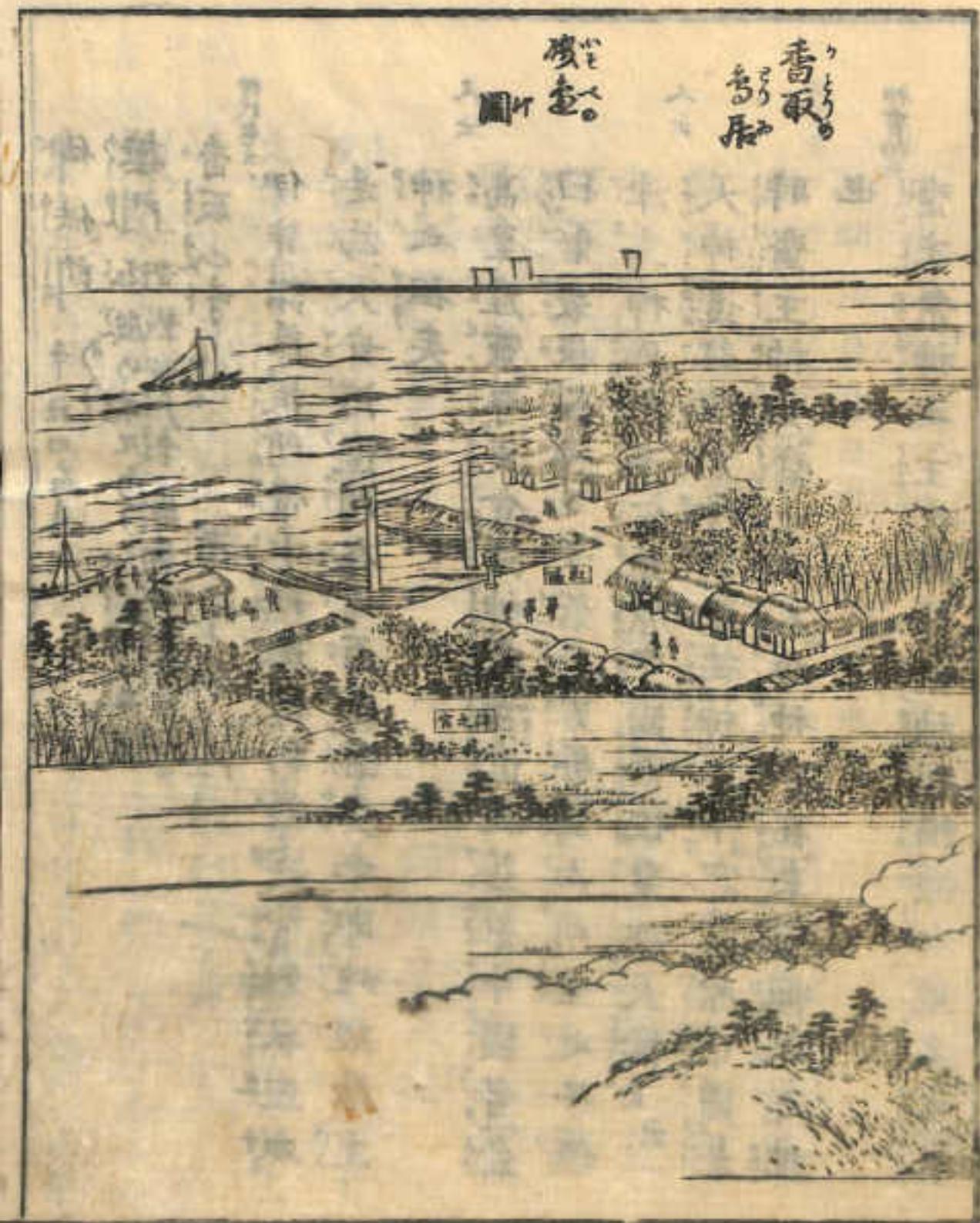
香取

祭神 涩津主令

若宮
鹿島社
疮瘡神

神樂殿
日的
子安社
奥の方
拜殿
辛社の

卷之三



碑供所

本社の事

樓門

對殿殿の木にあり左門右門

櫛櫛門

御代卷云伊弉諾尊拔所帶十握劍斬軒遇突智劍及垂血

香取山寺

右小

諸神塚

日上小

神代卷云伊弉諾尊拔所帶十握劍斬軒遇突智劍及垂血是為天安河邊所在五百筒磐石也即此經津主神之祖矣

又云

高皇產靈尊更會諸神選當遣於葦原中國者僉曰磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所生之子經津主神即令平定葦原中國而後皇孫天降云云

天神遣

經津主神武甕槌

神使

平定葦原中國

是時

齊主

神號

大

天之大神也

經津主神別稱

櫛取地名在東

也

神書抄云

齊主

祭神之主也

經津主

神別稱

櫛取地名在東

也

正五十九

天書云

海道下總國一作香取今爲郡名故經津主号香取明神是春日第二神殿也

經津

主神者天之鎮神也其先出自

諾尊

初諾尊

斬遇突血成赤霧天下墮闇直達天漢化爲三百

六十五度七百八十三磐石

是謂歲星之精裂生根去是謂

熒惑之精去生磐筒男是謂太白之精男生磐筒

化爲神號曰磐裂是謂辰星之精裂生根去是謂

女是謂辰星之精女生經津主是謂鎮星之精

支那法地也

先新舊事傳云神代よりの舊事あつて神武天皇

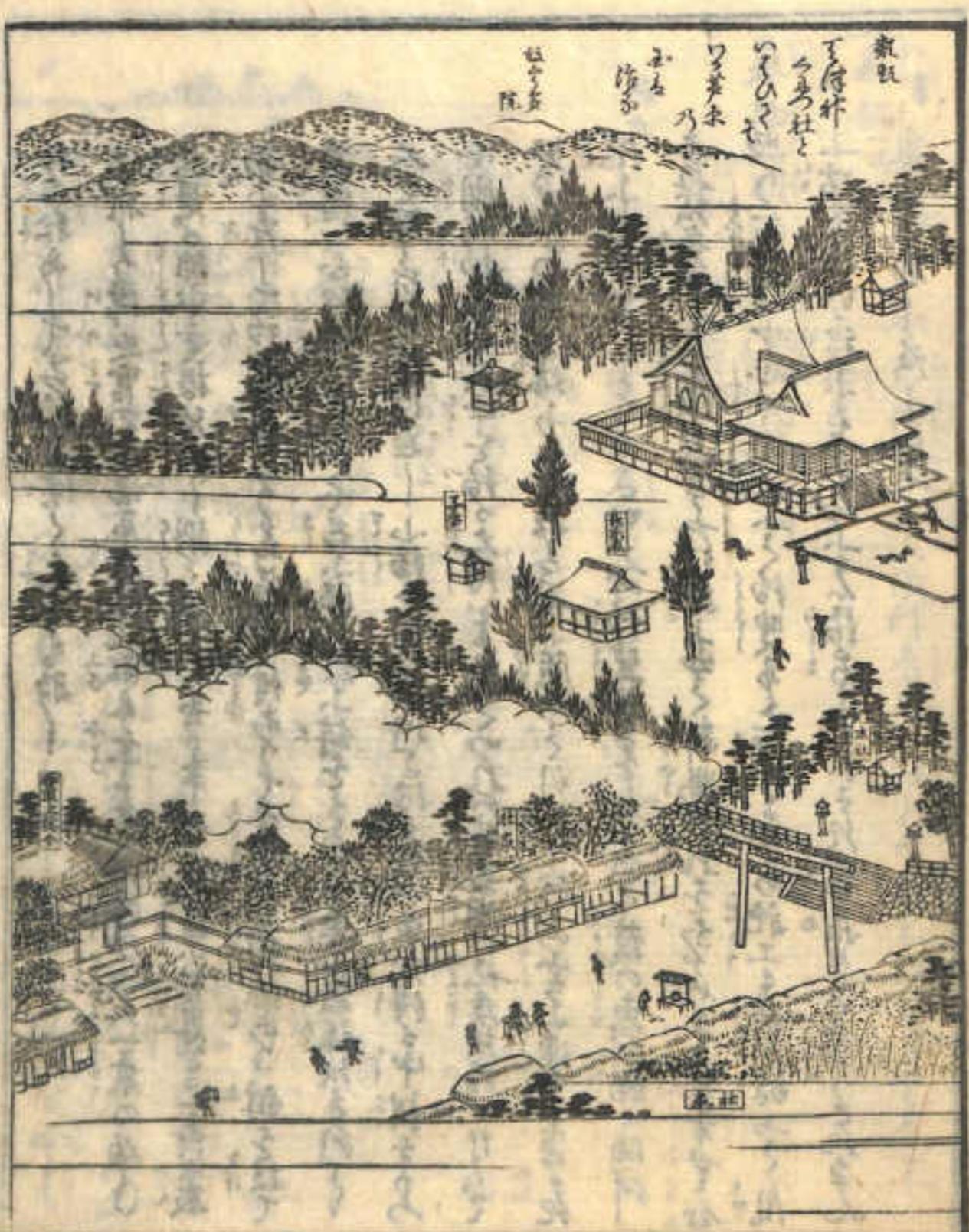
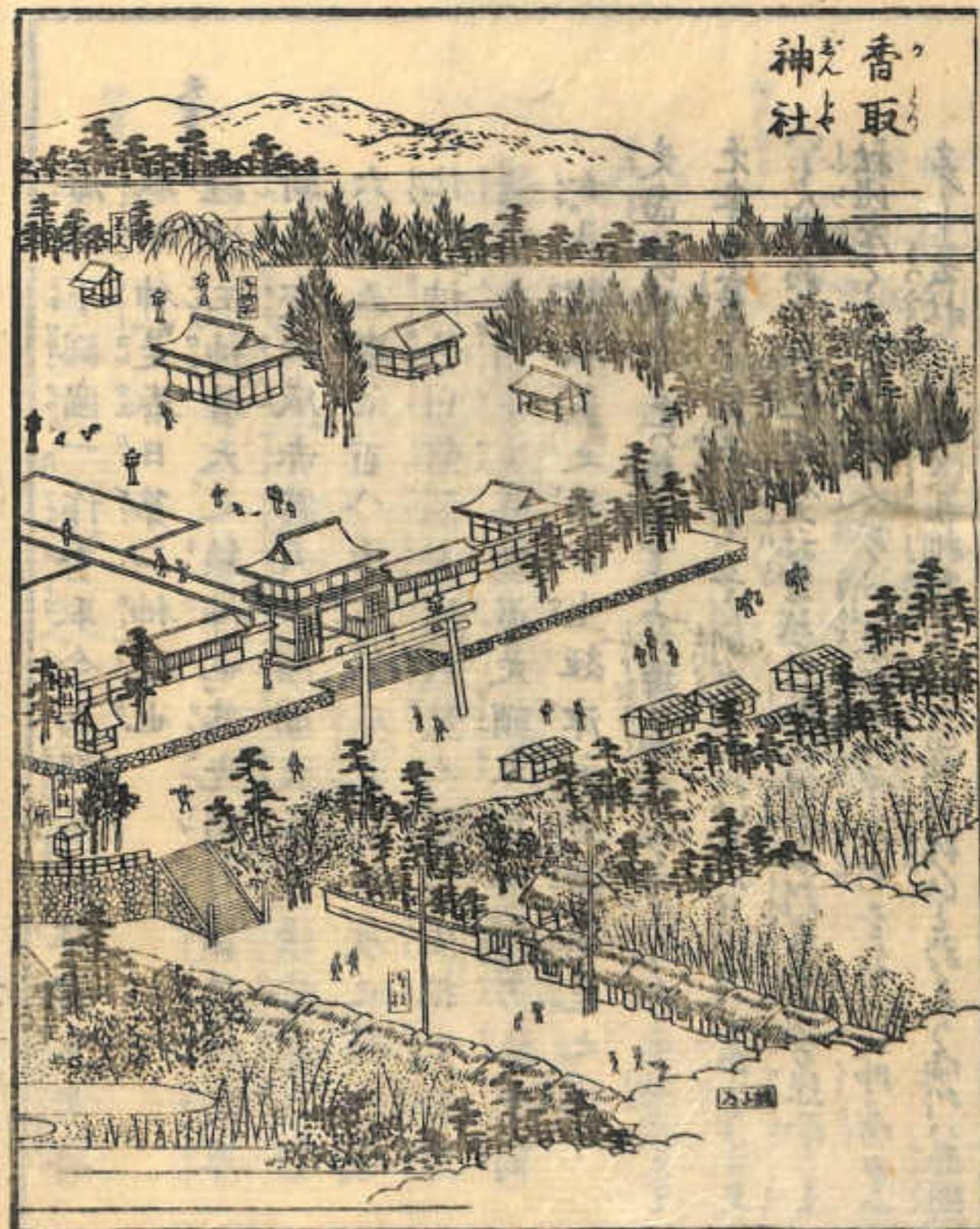
元年遷宮す

遷をへて至く例象は正月四月八月十月小處する夏

秋地度くして乃小傍人多く門前の人々來店軒をあぐ又傍房者

多く麥桔の頃も其居相撲あつては前の橋のとあまう廻行ハ通

香取
神社



の立候りてお糸不審く文房も形

七

あ林より津之宮の松林を度て萬凪の山天一葉のゆ
呂見る晴れ雲根城侵し隈くしてあ幸あへ道小若谷どもまに歴
面小走して内もろ義あら若尚の僧あうて文王を湯の洲あう餅を持て
其僧と申す様を食今若小服を被小餅をきめく奥を取福城を出く
人を帶びて然蘿はるゝ山道をりつゝ川よは五六小奥伏侍の中餅をも
て團扇扇を其中と移る大約をも候くつれど其美園の法度甚湯の舟や
ひくかの箱を添へてかき風ふ隨へりけのあ雲よ連とてあた
風ふ散くものとくすこやその物雙蓋を却へて蘿の魚丘縣の浦川
こゑが多すそ一盃をひてけほおむく舞陽の軒をあづめと萬葉草堂を
もう一端草堂貴重ト御ふく御典多モ酒をもてめ舵工も共すみずく風
玉方を漕り往ふるゝ向ふたるふちへさんあ居り多くてこれえ
息揚の處一端もよ

息栖

卷之三

西漢書

大明神

氣神 氣吹戸主今

卷之三

未
土
二
月
辛
巳
之
日

赤水二首

猿田元社

八九龍王社

當社之人會十五代神

詩人傳

庫
九
卷

卷之三

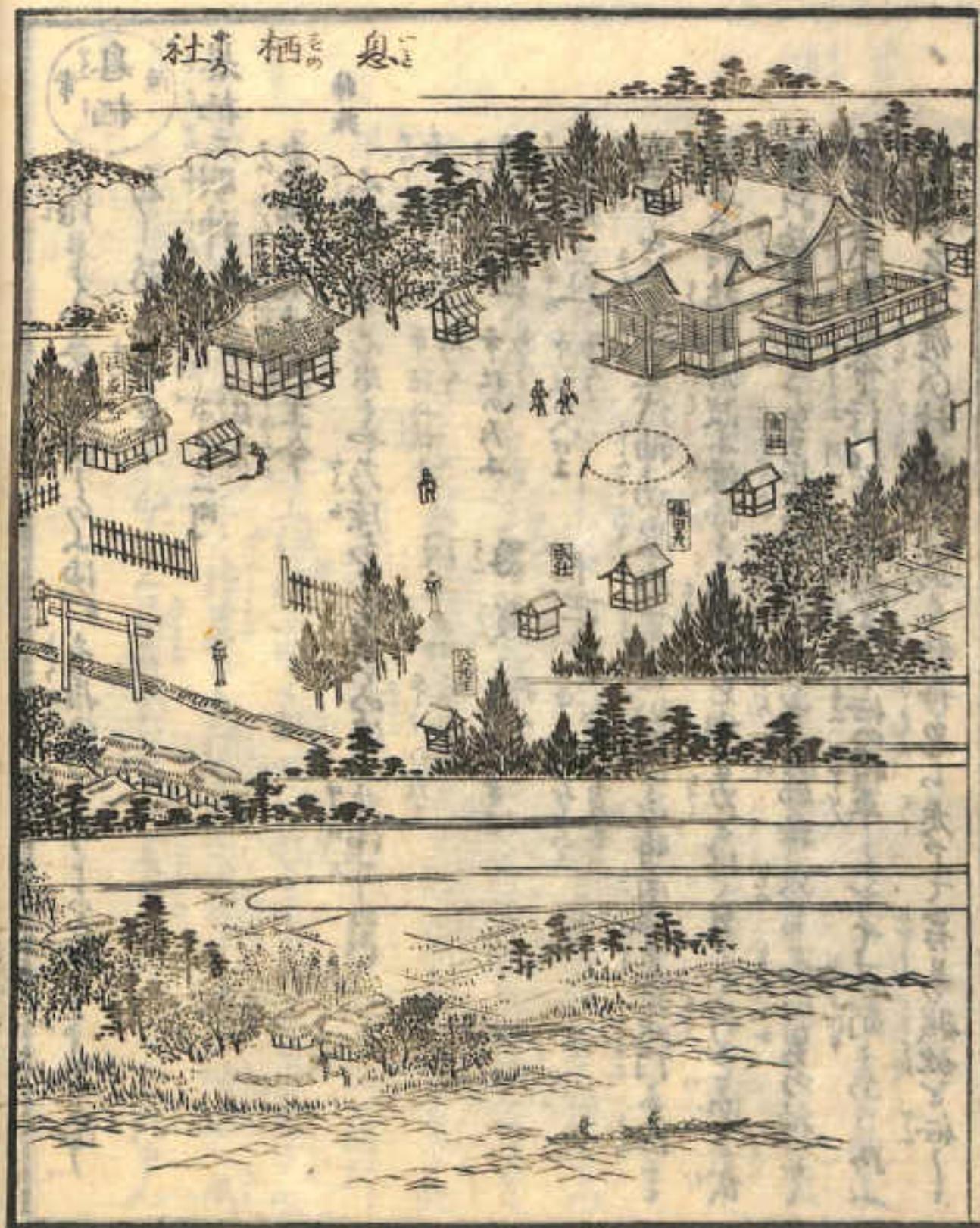
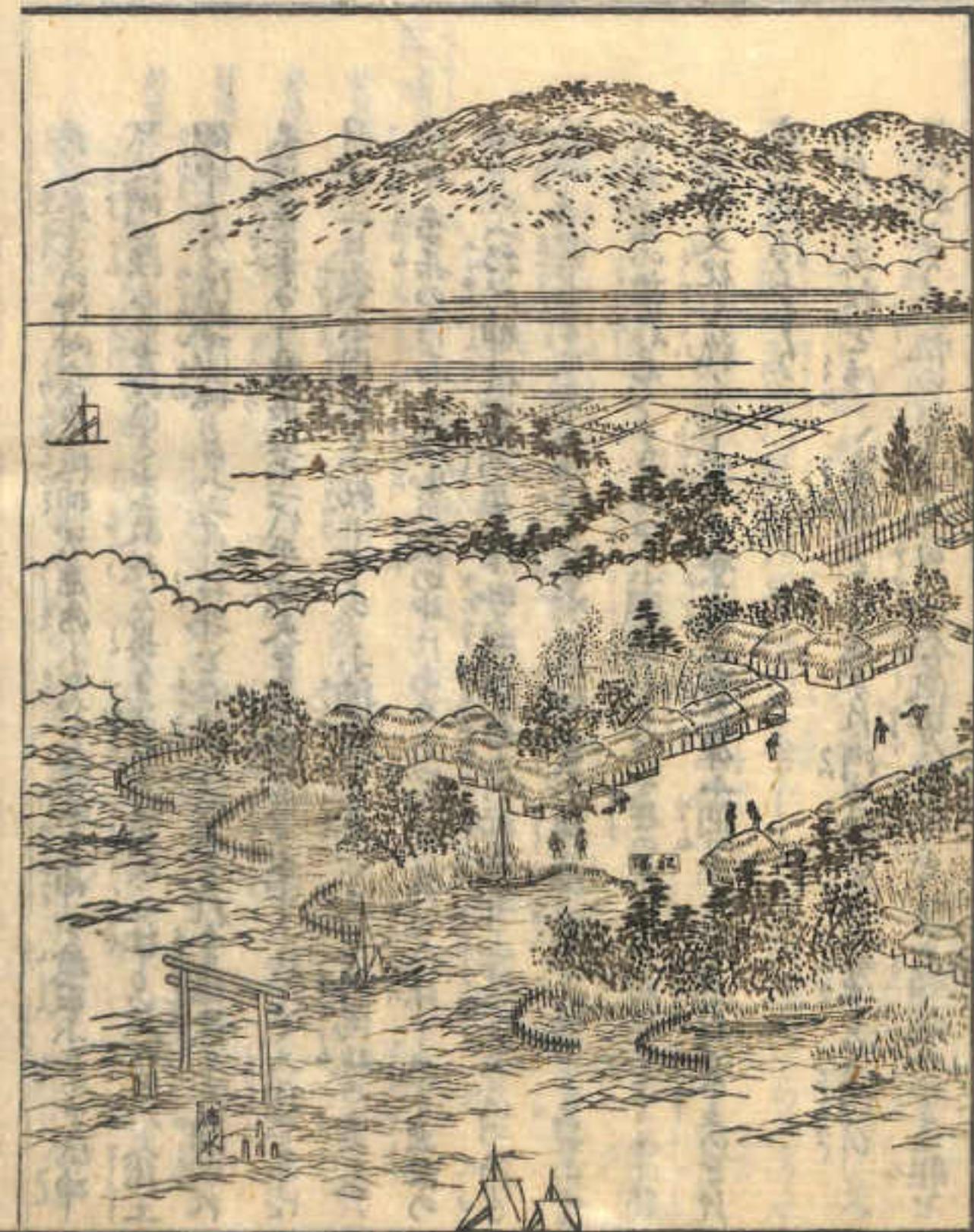
卷之三

白玉殿より上候ひ神の

久のあく鷺舟忽ち

走りて害易賊歟と

卷之三



詔還すの所は武甕槌神社奉爲小室と據威主神を櫛取小室御子神
大後嗣の候事もあしくま致化る異なり故小東園二社とし又時人八戎王
廟中トテ陰陽神トニニれ石井と爲神より歎ビこれ合號摩ノ用出
是比靈家うり厥后五十一代平城天皇明神とする事一統ひそ文國二年正
月十二日義宗内麿小勅してらゝ小神祠を建立又法輪陽神の靈泉へ
海中も居の左右ニ涌出たる廟の中にありとつとも其事ハ殊ノ如小西院の
事とくわが神社滅失する後勢國朝慈守の星井山城圓賀波の所よ
往行は靈水と曰幸ニ前の名泉ニ又神寃小龍神歎ちの所の右觀おも
て枝葉の擾れ立てて傍中小廟湧水と觀の中には木瓜生ト干房
木を又根も乾く上から禁裏の寶庫小納つて以當社建之のとれ
あふ猶存つたり

それより又船を進み、麻瀬まぜとあ爲ためした河の幅ひろはすこ度どのして漂うきり、小
舟こぶねの斜かたき流せん航こうの如ごとく百川の合風勢あふわいしの如ごとくして嶺樹千里の昭あけ

本居宣長
ノ十三

廻^{スル}ア幕^{マツ}蓑^{マツコ}蓑^{マツコ}同^シ小^{ハシ}あひと^シ傳^ツ海^シ太^{ハシ}暮^シ陸^シの^シあ^{ハシ}アリ^シト^シ自^フ天^シ空^シ人^シを^シ廻^{スル}
チ^シう^シ招^ス入^シ海^シキ^シ幸^シ名^シと^シ其^シ情^シに^シと^シアシ^シ候^スアシ^シ一^シ手^シ上^シ聖^シ國^シ利^シ根^シ川^シ幸^シ
圃^ス生^スヘ^シ太^{ハシ}鹽^シ門^シ魚^シ依^シ川^シ鹽^シ狼^シ川^シ競^シ波^シ川^シ等^シ舍^ス—^シ土^シ人^シ利^シ根^シ川^シと^シアシ^シヒ^シ
ヒ^シ派^シ四^シ河^シト^シ急^シ圓^シ府^シ川^シ二^シ事^シ海^シ信^シ太^シの^シ五^シ郡^シの^シ間^シホ^シ牛^シ久^シの^シ湖^シあ^シ舍^ス
又^シ下^シト^シ急^シ相^シ馬^シより^シ一^シ川^シ流^シ幸^シ國^シ新^シ宿^シも^シ一^シ流^シ舍^ス又^シ四^シ鷲^シあ^シ海^シ
太^シ洲^シ島^シ膏^シ原^シ海^シ原^シ有^シ一^シ者^シ取^シ原^シ兩^シ郡^シの^シ界^シ九^シ度^シ半^シ里^シあ^シ半^シ

卷之三

又香陰

都下屬へ、其の仲書く

卷之二

卷之三

白波の添え毛を見て仰天の原風景のうへ歸るがうう

土庫門說

卷之三

おおきな死の体をひきずれよをかと思そぬ人をまわは

定
家

あくまでも日御坐して雲と高鋪のあ所あり樹へもみゆふ輕画を
見在する。因表の御安堵ひき去事。東の邊にて宿泊あり

老の日は屢々研ひを往て谷のモリ其社の少林りづくに經小界
見また車と波の上と碁ふこれも人並み其事は論じて又あれ等

とくあへ城國の事よりは極うる六日の事も先づく小東方朝半列尾
外祖列宋本南山にあつて地の度サ五百里上下不記草瘦國の中半山

やや其事蘿苗よけく長三丈升人已小北なると見と即これら伏處庄客
種がくを船工よせうく船もしひね船もかく席船のちをのりと小舟く

下總の本庄の松の湯場とうら麻湯にて船路十一里又より船宿と
十六里半船と赤船の旅舎小看守外房旅店てあすは衆客に泊
たまく宿舎小本望より船宿とよしとおもはせとあつて終ふ是を

こゑ伏居小本望より船宿とよしとおもはせとあつて終ふ是を

生んずるにて舍一例房身へ是日宿内の者伏宿と終と麻湯の

鹿島常陸

十六里半船と赤船の旅舎小看守外房旅店てあすは衆客に泊
たまく宿舎小本望より船宿とよしとおもはせとあつて終ふ是を

こゑ伏居小本望より船宿とよしとおもはせとあつて終ふ是を

生んずるにて舍一例房身へ是日宿内の者伏宿と終と麻湯の

拂原一海まで十條町道小かへん墨山あつて社堵の町三町げりう
神祠ふる

鹿島

太神宮當國一之宮と称を社代二千石

祭神

武甕槌命

月次新嘗

奏者社辛社のかた

神樂殿

平社の小工

龍神祠

二赤樓門の角

樓門

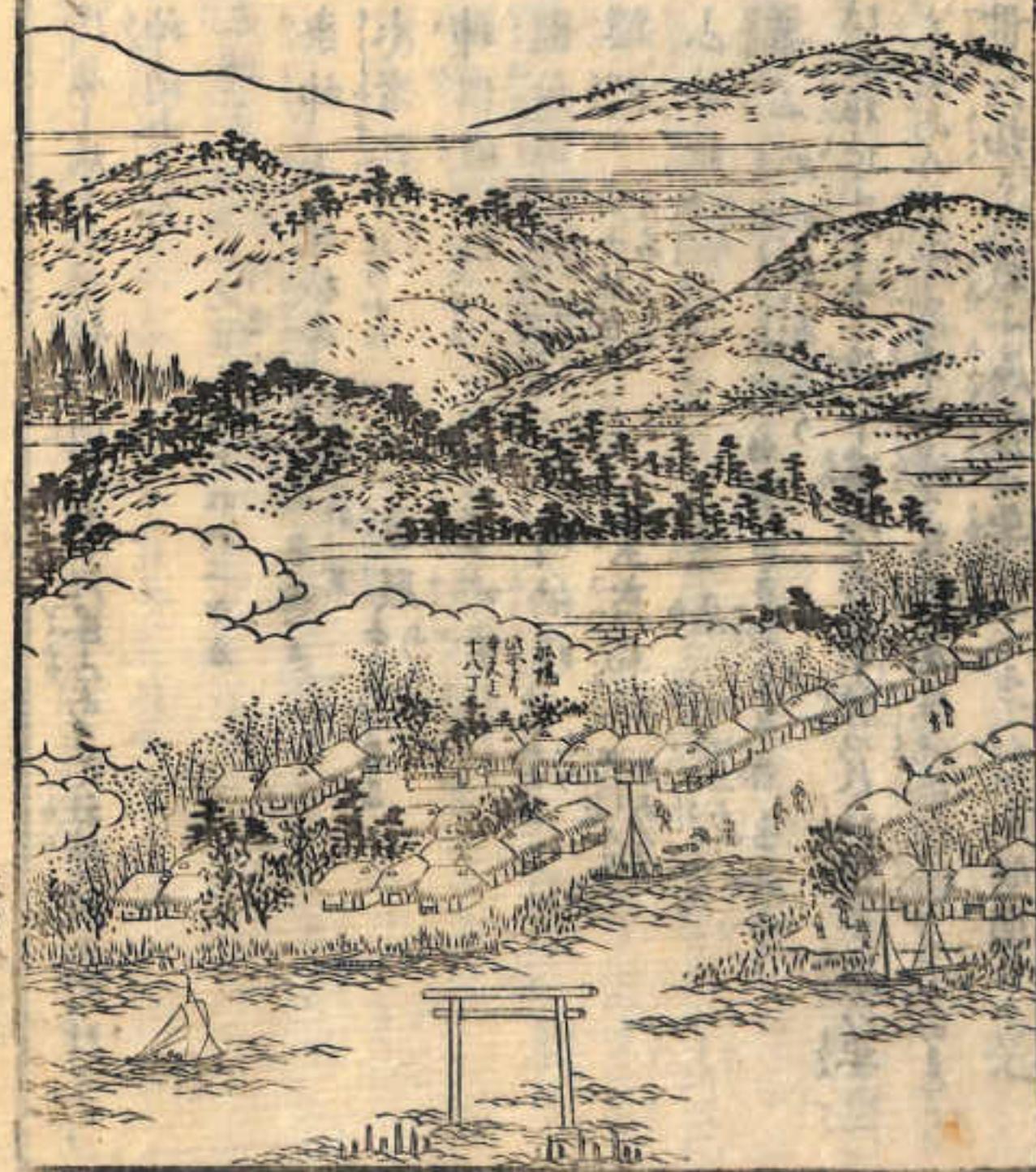
山神社左右玉立

要石

其形劍數石

は石根池小入る幸峰——其大さち幸峰に社傳云扇の要の山
大魚あり日本國中小通る其首尾麻縫の神行してあまを
貫た勢子に故不扇の柄の要れやくみて行して腰間へとよ

鹿島一色磯





高天原高社の東十餘間

相傳少麻治神乃乎御小步く辟雍を率て外國の鬼と相鬪し
神利あり附之舞麻羅モロ之延々風堂の下く寺より海端ハシマツより又附神
利ある附之而麻耳モウ成すれど却て越を直入アガリ家より入るよ

土人時ヒトノタメ其事狀アマリトシテ

御手洗井辛社より御内井あり傍小水井ありアイサの度ヒタチ四十回許

尚社のみだらしの井を貢底アマリのアマリのとく活人アマリへと其事狀
祈アマリふ小水井アマリあり侍小帝手洗ちあう又大黒天アマリ天龍室客
殿庫裏池アマリは福寺アマリ又侍不白碑アマリ

兼アマリ神代アマリの事アマリの色

雲アマリ

鹿島七不思議

要石

御手洗井

まがい川アマリ川原

伊弉諾尊

斬軻遇突智劍

鐸垂血激越アマリ神号曰

神代卷

曰

矢根石

高皇產靈

尊使

經津主

神

於葦原

中國

時有天石

窟所住神

稲威雄走神

之子

火

速日神

之子

武甕祖神

此神進曰

豈唯經

津主神獨為丈夫而吾非丈夫者哉其辭氣慷慨

故以即配經津主神令平葦原中國三神降到出

雲國于時大己貴神及其子事代主神共避隱於

是二神誅諸不順鬼神等而後皇孫降日向襲之

高十穗峯

武甕祖者常陸國鹿島明神是春日第一神殿也

武甕祖者天之進神也其先出自稲威雄走者昔

有天闇霧方四里許其中有小孔化為石窟窟中

有神是謂雄走。走生斐速日。斐生燐。速日。燐生武

斐雄

支當社と神代より矛槍の將軍として多くの邪神と戦り。又はも神武天皇東征の際にも麻あ香取の神より陣頭を守りありて匈奴征瑞に徳。終ひの後國平天下の鎮守せし。而ち小宮殿をして建てる所ふを云々。又向ひの第一第二の神を麻鳴音取うる。其後平將門丸漆の内神祠も荒廢す。びいば六孫王なる。依藤左秀郷。建巳又其後も右大將頼朝。玉天下の後達四年五月。今の中社。壯源方丈殿成奉書ありて社領若干。并寄附。終て例祭と奉事。每八十年度解。ある。其中に太宰うちの相手。小舉ゆ。

鹿島大祭

六月元日より三月半で月次の神幸五節勾な月ト

四月。年山祭

本居立大

五月。御戸會
六月。御戸開白馬の神幸
七月。御神樂初
八月。常陸守神幸

これの多の日だけ。しむる女の下す。あく付ら。かの名ども。底布の事に書あ源光と神木。木石者。と申れども。あれ男の。ひきだす。その事うつべ。ふすれと。あくへて。こうして。神をさうえ。おなれ。見えて。左も。右も。ふ男の名。あく。おと。六度。そ。御前も。それ。を。室。く。男を。の。入。を。う。々。お。た。と。よ。は。ら。ひ。け。の。す。あ。年。う。

物語古。歌とも。別初。ひ。お。陸。あ。か。一。函。の。草。北。う。の。世。や。後。頼。安。本。昌。昌。子。ひ。う。あ。ら。ま。や。う。年。う。の。奥。の。石。を。や。う。と。之後。

東。み。ほ。ね。の。と。そ。ね。す。ち。ま。ひ。と。け。り。た。あ。く。も。ふ。

漢人詩

十五日。月次神幸。月廿一日。月廿二日。月廿七日。月廿九日。



二月晦以神幸七庵降神伏搏。

三月月次神聿七

日廿一日一月光神幸

四月十四日より二十日まで幸社奉事社神事

五月奉月の毎日より六月五日まで神幸流瀧馬町

日月月次神幸五社

六國志

丁巳年夏月
和封家

七日 七種神幸土用干神賀伏見

同十日十一日十二日平岡神幸

八月
朝賞會神幸

日月
月次神章七言

卷之三

九月九日
重陽三神幸相摸舍あり

月次神幸七度

十月 玄日の神幸

十一月朔日より十五日まで幸宮界奉社神幸

日月清火燒因酒神幸

初午二月祀墓

同人
同人

十一

本社の馬子あう又井の馬場子をあう
御経場観音堂へせぬ記(なまくとよ今山經場)

廣圓寺（名古屋市）原治作。本尊十一面觀音坐像。一說是元和元年（1615）由承宣院人自宇治移來。此像的頭部與身軀比例，頗為特殊。

赤きるの枝はさくよ圓うり
山手の西人の宿へりまきと

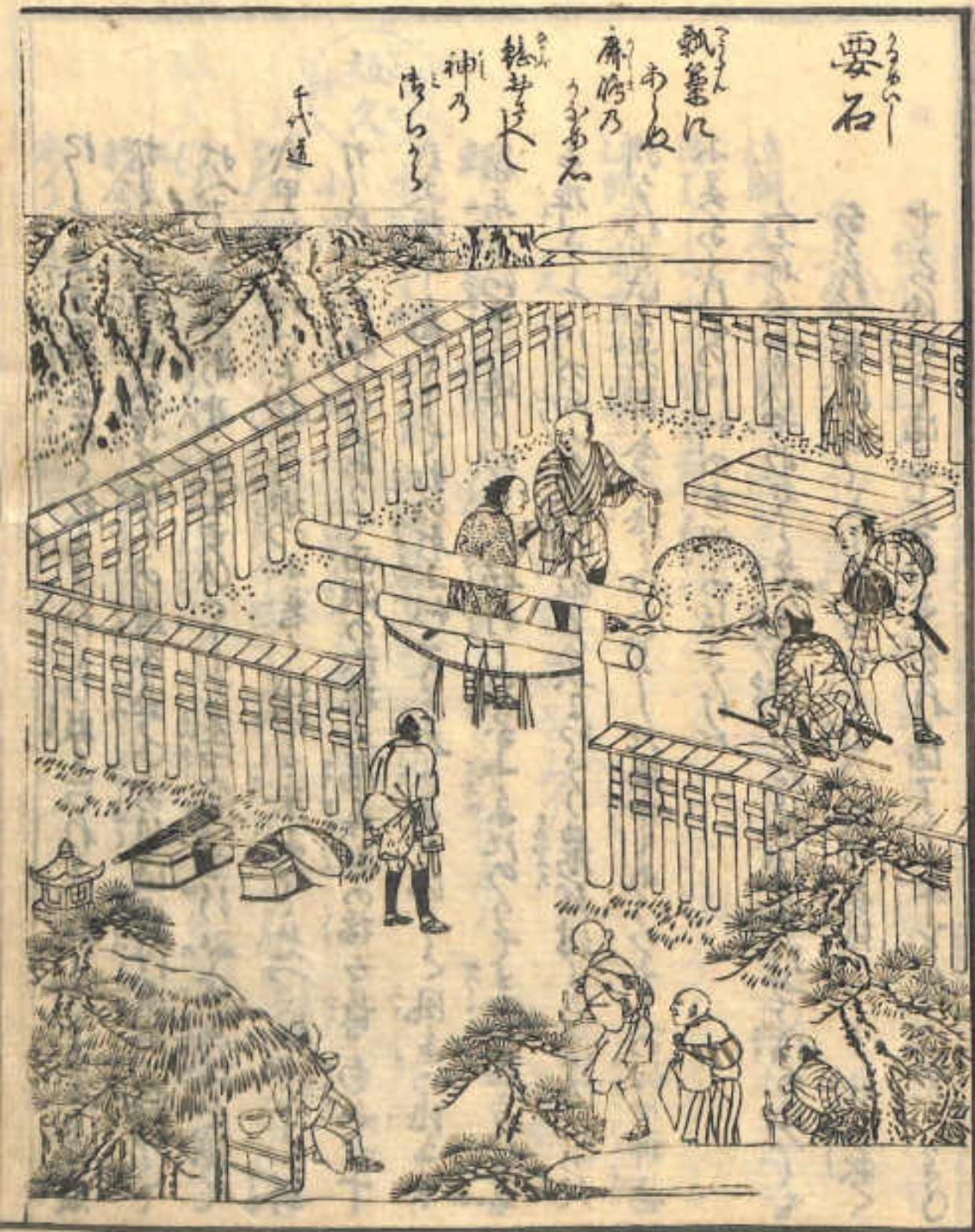
鹿鳴故城

子を被り又およまきを應答せぬと聞るより人を舵工ふ船に日の
とすあら浦風そよぎて吹あ是れ浪打河の舟をゆこよく遙く
うて千里をあらぬのさうぞせりよ船宿の舟とい東あれ方ふ
雪やうせうて風うはふかくお波高くば楫板うちて波のまく
漕とも押とも流へ草くみたけり幸あら波舟ふ船の舟あく成て
つゝ遙風はうへ楫板を上くねの舟へと用うどんがすらま先
舟の舟の方へうへとよゆうゆう風の舟車へとすだつま
うす里も來しこんふ殊へ舟もやわうに幸あらせひよねくせ
やえちねまよ膳をそよびゆくぬまぶらふあく舟の量うあくん
海きくねが又この舟をの旅へしてはよ舟たるもよほいの舟かとせよ
向ひの舟よなへむつは舵工御舟の舟よ幸へ向ひの舟へ漕りふ東方
て一所あらこそ舟ふ舟ゑどりとて又楫板立すと押りふ室をう

要石

氣蒸れ
あく
席乃
あら石
軸替
神乃
まらす

千代道



りて東方の町ふるく私あらわしに起まわれん私もうやうてよだ
かうして而も伏持せねえの道を尋ひありば道仕置をゆきて
めぐれき御世えとひくして至らのを行野成山林を越て
武里許もゆけを極みのゆふる者くは地とを並びてゆく斜
ガク十二の橋もあくて西湖の六橋又陽長縣の橋と長もわ七十
武大橋中高くして虹のれふ似てふるよもと比く風色の港う
宿居を河岸へ送りや又筋引とりふすみにのりてますと罷えま
え岸まで川の向ふよりゆくよう農耕はとむじははいわれ
あらねどけ盡の都令のはとよとよと遊なもあつすの江の神像
ふきあはばの川岸のあ渡つて云ひけ
人吉多立寺ひやめ寺とが城の中ふきすげうんざの西アモ
あらく參詣あきとれむじと正月の夜成の夜成アリヤセ一秋く
せうらふ御てはそとあまうこれあつて年と金一すひま

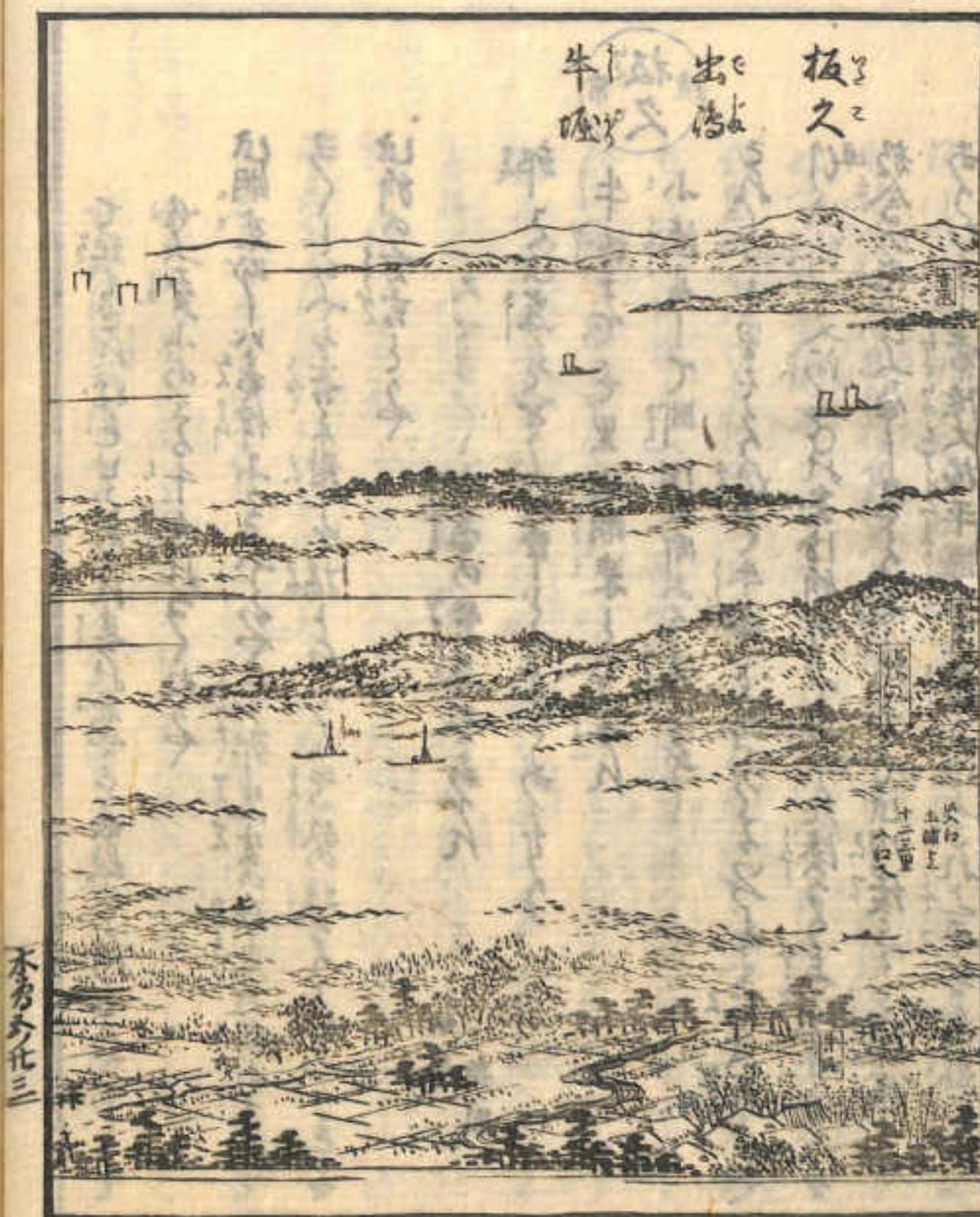
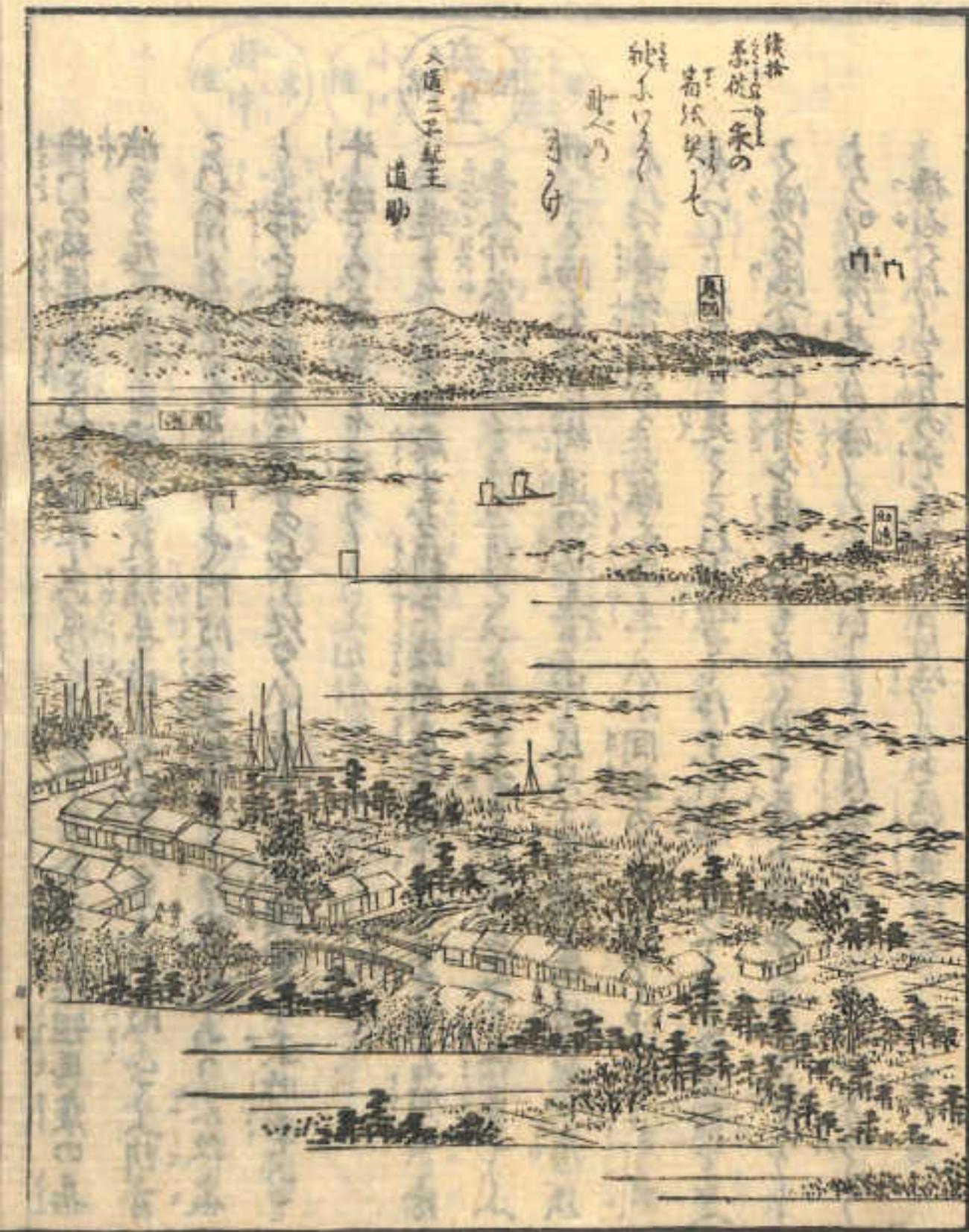
て起もせでねとせとあひまはるやとぬぬちほとスミヨシセ
ホトトギス小あさる千きれうねく
は廟東嶽ひ事律ふるくとくやあ郭先生の歎息の傳あくスマ
ヨクともよと高木村にて攝とくとくうきの聲うとうとくまこと
い所の方言とうや

細五
祖風

板久
常

牛並までもぞ里又廟來とも書ん
小陵あて町に立町あらも人多

えり山も又阿子は所あつてかへた陵うらも人多つて
板今の地とて山一毛うすやうすては川縁を下浦底とく
あうひの常陸太根平國富の岳一峰ふされ上平を眞盛の文



將門の駿運小藏えりと其處を爲くまゝそ今ハ土屋但馬守の居
城す。九万五千石領す。近傍牛坂よりあれ方ト阿波より。貢有
川を西へ下る。地よりて阿波山安堵もと。梵刹あり。大般若
とも称と常陸房は尊のゆゑ。ゆへ所へ又北須賀ふ某昨夜を

牛坂より麻生まで駆り。

麻生

玉造まで四里。麻生古跡。佐渡河床め城下。かつて百石竹せし所
ある。外室もあつて。引いて是を考之。室次第。至てよ
所。下を向ひまづ御道の張りとあつた。里難まの酒家。店は
天井に墨筆。紙ある。深木ぬき。小間物のあらひをす。而れ
久つて外室と対して。お擇りあす。併しことを小盤とす
て。湯は湯へ。墨色。墨を避へねもなく。日も雨も傾かば。月も升り
うち。御見其子。峰くあしい。もみ月の名前も。うきて能く
梅雨あらう。春のやがて。六月。涼すを。鴻巣の宿。誰も

本多九七四

誰も

先をす。念く。ふ事く。ゆうて。どうぞ。をめ。ばす。す。ん。あく。酒。旅
きく。先客。しける。肴。少。精。卵。味。ゆ。て。是。か。て。被。て。夏。油。味。ゆ。
さ。て。出。ん。よ。方。も。せ。ぬ。車。ほ。く。ス。か。し。月。も。持。す。う。れ。そ。か。一。来
寒。く。奶。ー。絃。幅。を。ゆ。く。駆。え。せ。ま。す。ひ。う。ゆ。く。セ。つ。絃。無。絃。曉
そ。く。用。考。して。立。出。

玉造

小川まで二里。前も。かの。旅館の地。も。ても。人。も。多く。阿波。して
通す。一。旅店。附。房。も。足。て。ア。リ。モ。リ。く。て。小。川。の。肴。少。く。

府中

府中まで二里。北と水戸街道。ありて。附。房。旅店。多く。又。馬。行。裏
も。あ。う。水。戸。城。下。や。で。七。里。と。よ。は。北。ゆ。き。繁。ー。旅。店。多く。

小。川。

と。い。小。店。と。将。旅。馬。と。う。そ。も。東。ぎ。て。通。ゆ。う。て。東。ー。湖。行。所。多く。

小。見。ま。み。か。農。家。あ。て。附。房。あ。ー。ほ。ゆ。ま。や。か。ー。こ。不。み。う。で
頼。む。ふ。ほ。頃。麦。刈。因。種。ふ。く。忙。ー。と。ま。信。だ。か。く。道。ほ。ま。の。き。人



ひつわせと小畠の町へ歸ふまへへと案内を乞ふと
 芳木えりゆくと墨すとあがへて石樂を越え重ひと重く日
 本の藩より下りてくぢれを御行船とだらうよりよしはする可
 りまく重材が上り河より下りてく案内のへと通候すとてく脇を
 入路それより下るはくほり道を下し山家と並んできの
 月ある是が小畠の里より流波山の森林うちの道はまの山林を
 たる宿を下り五六町もけく町よりの酒家たりあすかく今後
 お本客わくとて止度子はり入浴へとくつてゆきことある
 ものの森より宿舎を下りてまづ農業忙しことて止だ
 又宿を下りてやみやくある葛家とくぬくぬ
 十三塚までを里小畠の宿ばかり下りてく
 被も着たり笠もさく成道を高く風雲と夏至當故伏見を
 雨宿りて淋しや側小法雲寺までへ拂えあはば門あは流波山を

碑あり宇山藩士崎允明種姓家水八色年夏よりこれを建ふす
御へん碑文も墨ぬれば目つゝ多額うひに油被をも解て御施波の
字下見了所

宋本子言

十三娘
常熟人

筑波山上まで走里十三宿の里やしに山筋もく農業もまくく
これより山へても通あり道を峰嶺して東南崖嵬うる謝靈
運首山の峯に登る小本廬を看まけ嶺へとを下る時も和菴をもつて人
下房もれを後歎狀をもつて又蘭亭記云會稽の山陰蒙亭か今
は地宗山接炭谷林脩竹あり又俛仰の間小陳迹ありもむらのよ
比せんや

筑波山中禪寺 流波那
小石川
新宿
山頂小堂
峰あり南筑陽峯と云ひ北を陸津とよぶ
筑陽お野にて八圓の 草庵
安房
相模上塔下塔 武藏
寺號とある坂東そ雲の名掛なる者を古今の部
易を冠せすてたすあらん所小浦よりともあれ

色は紅葉レバの小など見るも鮮く秋分をひでらへと爲うるや
青葉シロバめり一葉爲て何れか不あらずそれ石子なまく疏波スヒバす
ひけをよどみと初ハタハタより後アフタて身半生ミヤウすすむあぬふあうト異

10
ばくもねひは面の面すけとあれと君う御れ本物新いふ
従前
従前指の本比ひ事あまほりまことまくねともかくはふと
従前
従前もかゆくうれしとせよがはるの拂ふりたむれを
従前
従前ひそかにまけふーぐれやせすたへ少はらうとをな
従前
従前もくらはるはの處をもと
従前

は今すなまくと極め苦事ひの都さゆうよそじ初え
五度身をかわせらるゝもて故ふれがれ

桂明集

男御子社 茂波山湊陽峯下築木大
庭喜式茂波山神社二座大神

荒波山湧陽峯不顯有大
地主式荒波山神社二座

素神 伊弉諾尊

女軒辛社

陰莖小惑天

象神 伊弉冉尊

日讀尊社 月讀尊社

水

素盞烏尊 煙兜尊

共本山御下

旗奉

二神乃幸原

水

岩屋(岩屋ノ水) 女峯(女峯ノ水)

千手窟

窟(窟ノ水) 藤(藤ノ水)

安度石

石(石ノ水) 德(徳ノ水)

鷲鷗石

石(石ノ水) 鷲(鷲ノ水)

自雲滝

滝(滝ノ水) 雲(雲ノ水)

羨那瀧川

川(川ノ水) 羨(羨ノ水)

後根

はくねる峯より高まる川亭をばくして御す城の水

後根

小泊瀧の花乃うらやま野裏の巣すを高む水のうら

後根

はくねれ峯の様や五三井川あづ神く御どくやほりん

傳經般舟

動後古 美那農川峯より高む紅葉色はりて波とすや深らん

正三経重

櫻川みりの川の下風き

大御堂 筑波の山下すか

幸る千手観世音

觀(觀ノ水) 一(一ノ水)

三重塔

塔(塔ノ水) 安(安ノ水)

同山隱

同山隱(同山隱ノ水)

藥師堂

藥(藥ノ水) 光佛(光佛ノ水)

永圓持堂

持(持ノ水) 大(大ノ水)

聖天子

子(子ノ水) 方(方ノ水)

鷦鷯堂

鷦鷯(鷦鷯ノ水) 方(方ノ水)

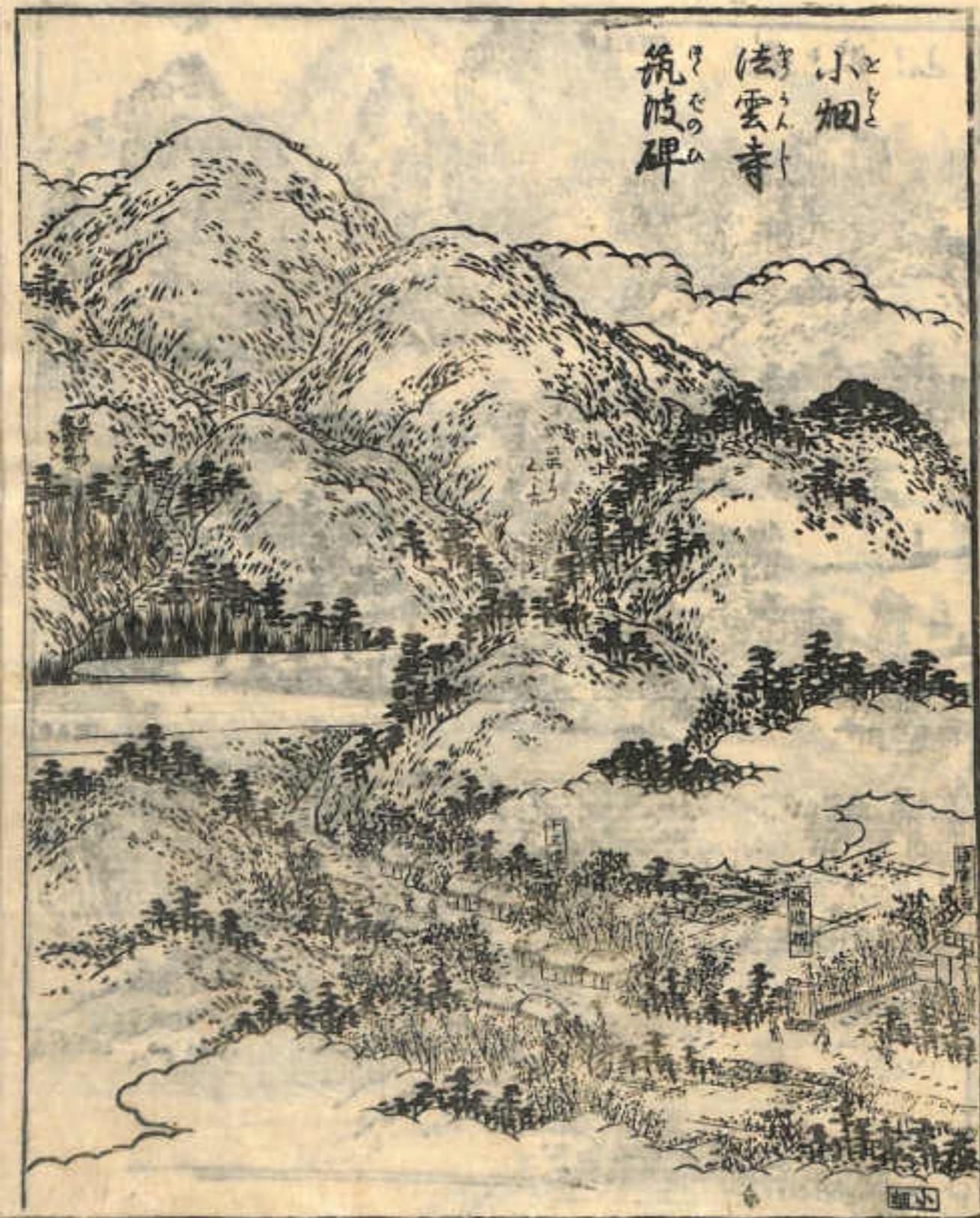
男躰鳥居

居(居ノ水) 方(方ノ水)

女鷦鷯島

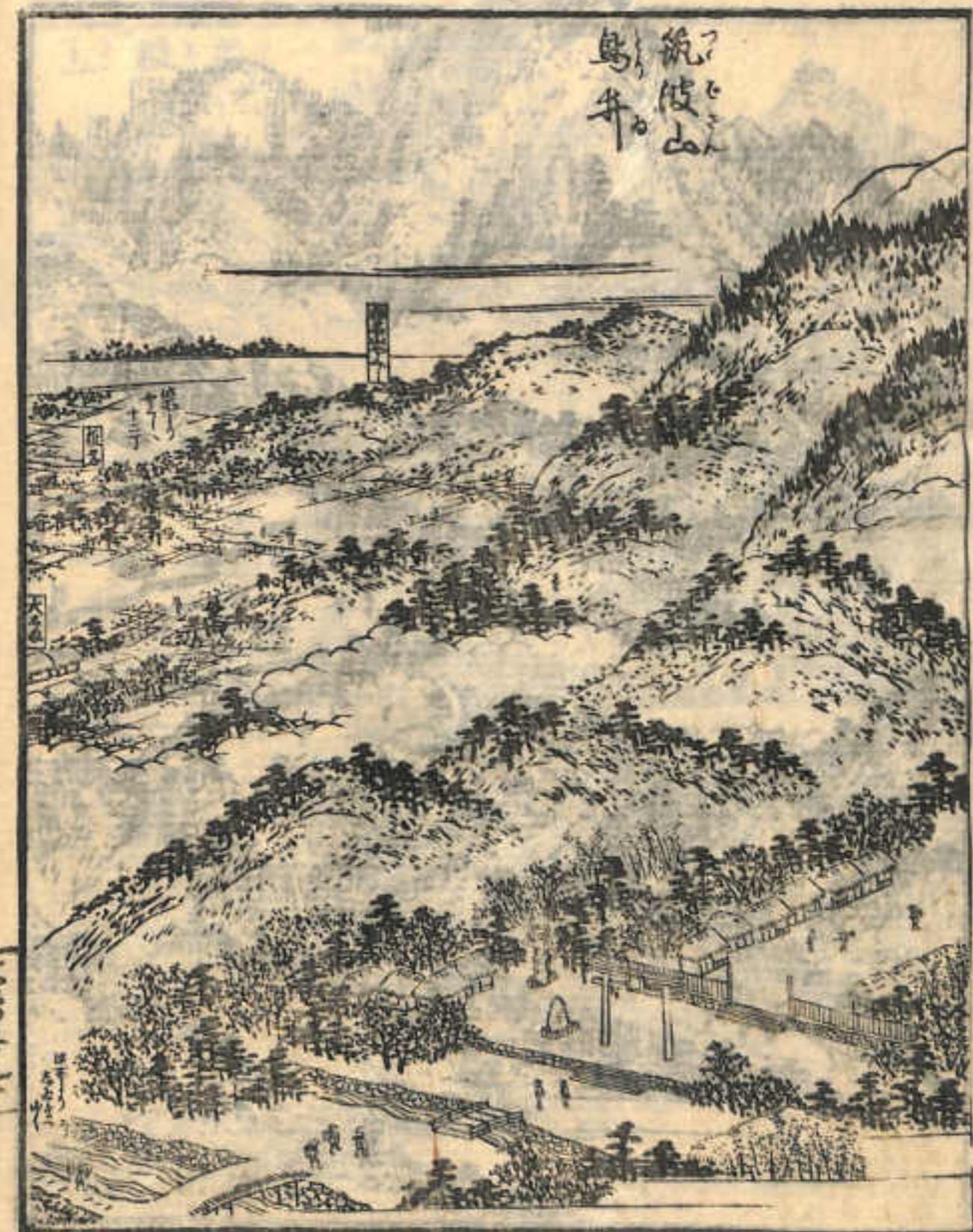
小方

支はとは原幸名疏波と書をつゆ（東海連流）て波打の國
故鹿防と樂くあれが避るこれやうと筆波を書た道人也アモ
疏波と名は二神登山（多ひくね波を麻る）の海上退けあと森
彦（御上乘）おもひて後人皇三十代桓武帝の御時法相の名勝、徳
澄大士（けよよ草）とこれ幸山（まことやま）にて、上小柱乃御神と教傳し其外
御高柱（こうばしら）の御法道（ごほどう）千葉（せんぱ）塞（せき）手（て）千手（せんじゆ）千眼（せんげん）の大照（だいしょう）乃縁（えん）發（はつ）
紫（し）の奇物（きぶつ）天（あめ）誠（まこと）小達（こたつ）一（ひと）御（ご）伏（ふく）ト（と）多（た）ヒ神田（じんでん）三（さん）辛（さい）開（あらわ）ヒ
神殿（じんでん）佛（ぶつ）閣（かく）塔（とう）に（に）立（たつ）て毫（めい）と（と）く造（ぞう）成（せい）し終（しのう）故（ゆゑ）小（ちい）大（おお）士（し）自（じ）由（ゆう）
記（き）事（じ）ハ（は）影（えい）作（さく）て男（おとこ）体（からだ）女（めのこ）体（からだ）の御（ご）地（じ）佛（ぶつ）ト（と）多（た）ヒ其（そ）は弘（ひろ）ニ辛（さい）中（なか）弘（ひろ）法（ほう）ト（と）作（さく）
あ（あ）小（ちい）大（おお）士（し）自（じ）由（ゆう）
真（まこと）云（い）ふ事（こと）乃（な）キ御（ご）毫（めい）と（と）く造（ぞう）成（せい）し終（しのう）故（ゆゑ）小（ちい）大（おお）士（し）自（じ）由（ゆう）
男（おとこ）件（くだん）女（めのこ）件（くだん）事（こと）乃（な）キ御（ご）毫（めい）と（と）く造（ぞう）成（せい）し終（しのう）故（ゆゑ）小（ちい）大（おお）士（し）自（じ）由（ゆう）





鳥井
続波山



一卷五三

号にこれ畜生の神の靈泉それがまく鳥の廟ト子也と名前隣瑞
和食も源もあらねば山女ノ境界トあらば坂ふ立木の重幸山なり特大
東開宿家の帰郷旅あまはり難寫る一諸人道が遙かう伏東方の
靈嶽さとお宿の道乃神と仰ぐを思れあうとあんづる桺は続波
中尾五臺山の西面開けくちふれ本末くろもゆね
中尾小吳葉縣本末ト云ふ中後もよし廟の富翁を護持院と
号すある事にとまづ千七百石続波の明長うて奇異なり族
房多くあるかもまく先と幽園の高嶽あうてみが山神
寒き形づ

一鳥井
所附りふす
傳ふる傳

雪無くすうさんまでひそむたる続波山

嵐雪

椎名
常陸

小乗やで四里半これうちりくて林野を門へるうなむ所く
道うまが見づ木またひくほどく量と申多分多く民居有

小栗下野

民房を又所禁あつづれもにトキ高まりて間壁より川を
はま川を都度下所の圓界あり程より小栗は里小治ふ
はま川を二里八町小栗より馬とうて輕處生れ日わたりまば
酒をとたゞ馬縛の小結歸り城主くひす乃なれけふ妻を
望きひきそりゆる木崖をもあててむだりて旅て鳥居高
き候に毫く音のひく松齋首陽の左に入へうと三春のやひ
をとあ許由が顕門の月小佐一おほて三軒の器をもひ一を云
牛の糞くねくねすまゝよとよと若く

真岡下野

小守屋を武里八町は真岡と前を名す中御と本郷を
見し向うとあふ素門をとの服小用も是れ真是本郷と云
は前を近隣の村邑乃ぬ舍れ地されど高ひの底まで又販食人拍戸
も見ゆる白虎通ふ其袋也が遠近ふあひ四方小通にて金を震む
うれふんあぐとよ危蟲と陶器に付天下の中四方小貨

通して支易を内産不淺く千金不絶に自耕と陶朱公と号
優ある附と並相手をと廢人ありとて千金の主となると自負を
ゆらひくは地を辭とせられ又其原のり先見と自度こと馬
傍うて案内うてりく半茅ざらした萬蒲の花咲さんと夏枯
茅道ふ事一武里もかども人氣も見えだ馬縛りよばせん陰奥
までもはよきてかく四十里もかども人氣も見えだ馬縛りよばせん陰奥
よふおもと風うり人里も見えだて陳耶小漁ふくみと体充
は束の人もあらわに樹林もあく竹林もあく平原を走れと遙を
よ風外の遊練湯のまが解うりかみりくとてあ達ふもみ先
がる寒き馬ふあらひ後途ふそぞりぬを跡下葉主をくゆと云
全毛を下やあらひあれと行旅のあらひとすいとすいとすく絆の
の下てふりあはは山脈を越へて利根川下落をとこ山川を
越く半身を下す筋よりとれば通因勝とうと筋ぐる麻うて草體

然めどし源氏千里のへは幸あつていと艱難してかき詰ふる

下
小野宿

宇都宮まで武里半け街乃平地あれどいよいよ跋泥所くふあつて乃小
温玉河あゆひ脉小之陽西ふらび國小之水あるねとまくねをまく水道
毛とすなまく足ふゆくするものに苦れぬ處草の年月季の毛うるく
道をすりは衰のう心せんむく浦くそやさんきのすよりく
今も思へち我身若さう今孤むくをうば我ら若者一ゆく
うれし行幸小助けらくねじまともがくうづくとてすめえ
あつる

下
宇都宮

白河まで廿里半十三町松蓋を六十量
は附の珠まゝ戸田園帳家廢すて七万七千八百石を貢せし時は龜
ねのゆくく方の毛家あつて橘の前より勅使は戸内よりの奥羽

東方五地

街道にて販食東右賀食家幸一間中はあの方不すねえあ
社殿奇麗もて清人美いは所の生土井と云
宇都宮大明神宇都宮大市中下
祭神大己貴命例祭九月九日

下野十社神

神殿の左ふす

神樂殿

神馬舍拜殿神社の左

左右廻廊

神馬舍拜殿神社の左

猿田彦社

神馬舍拜殿神社の左

天神宮

神馬舍拜殿神社の左

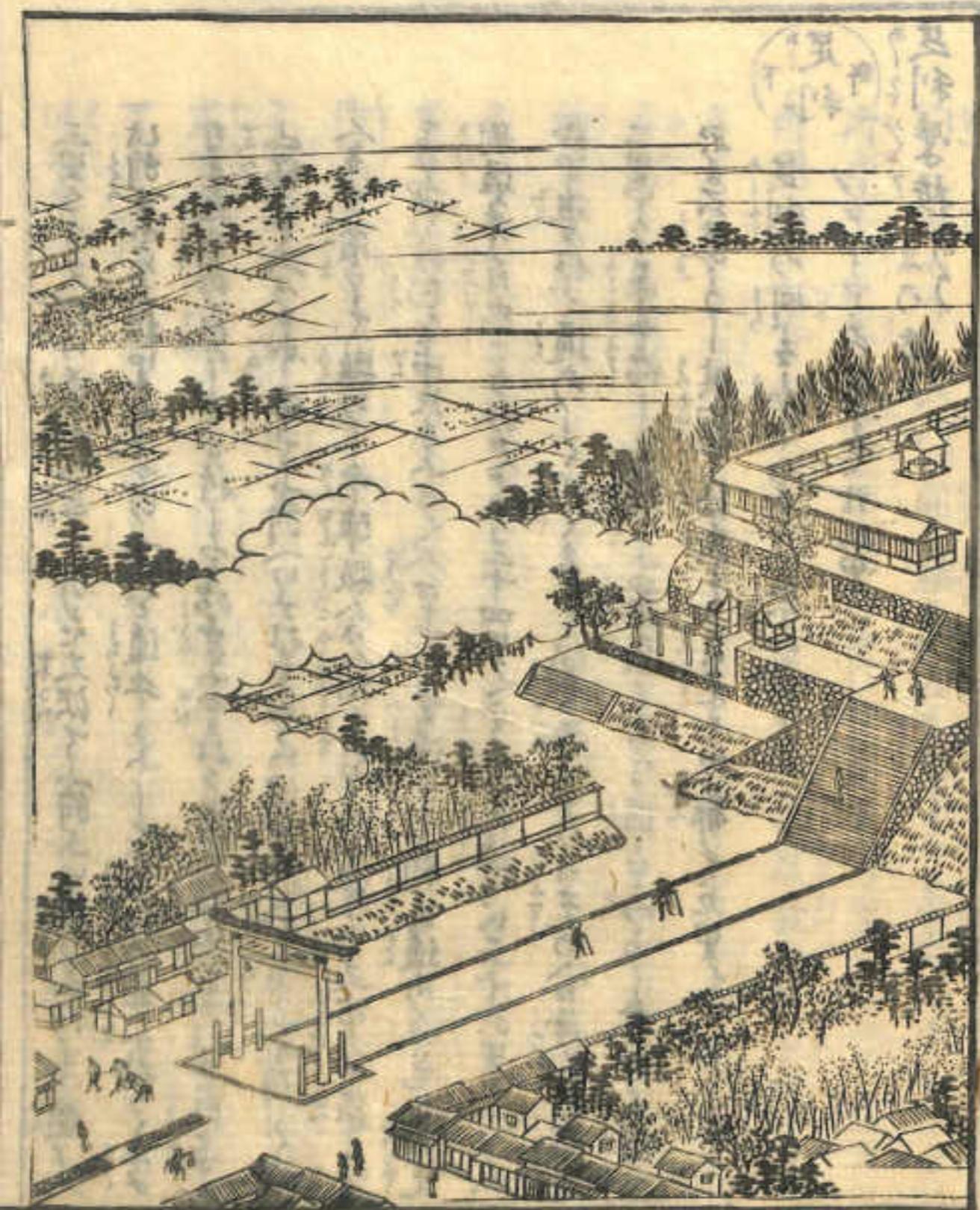
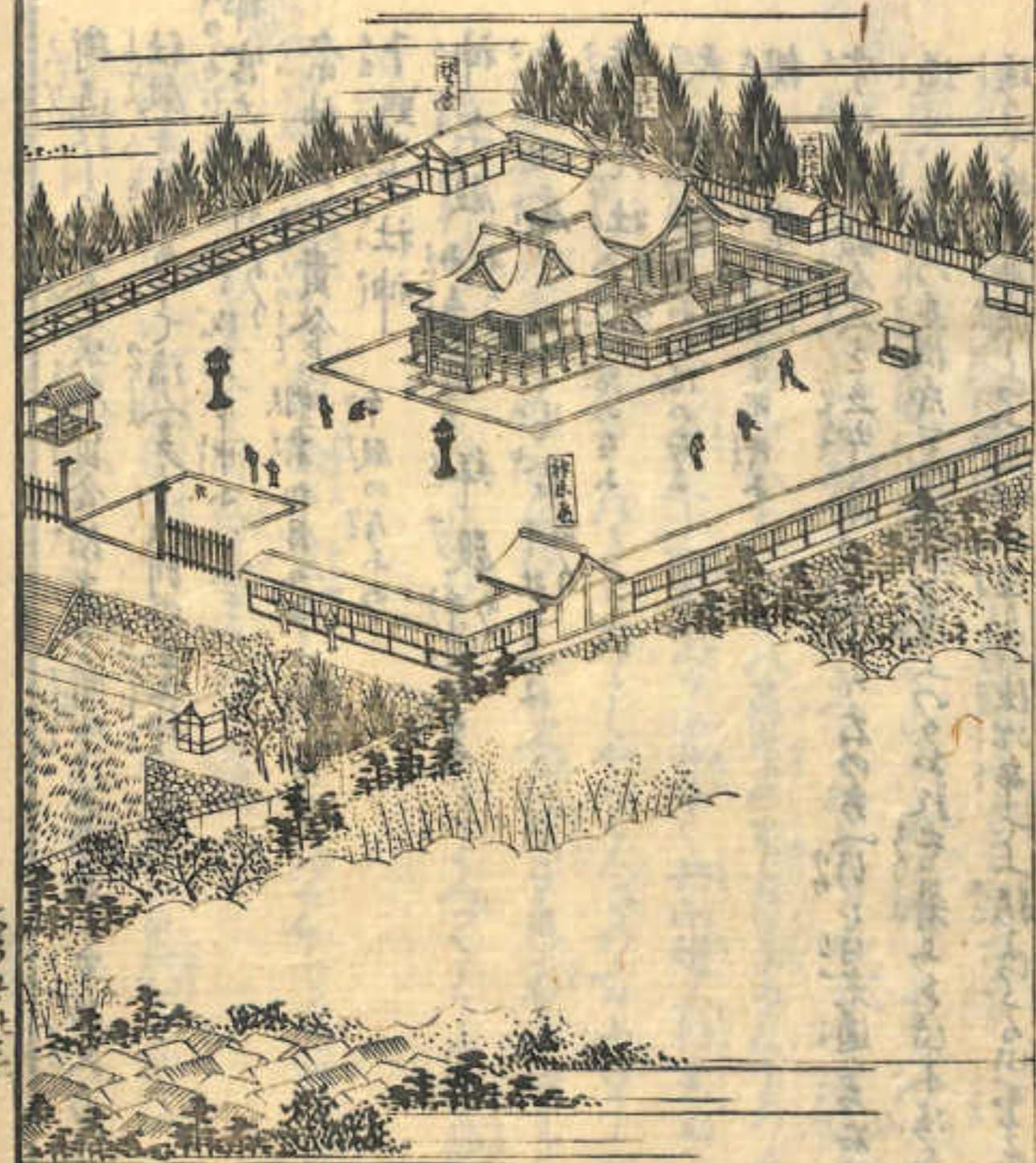
觀音堂

神馬舍拜殿神社の左

宇都宮の販食人を立すく所乃幸より右の方(ひ)を日光通く左右の
道より老松乃並樹而て道を度つて左のを暑みとは本降を

通つて涼一垂流とよ左の伏見を是れの後治布て上駕よするに事まで

宮都の宇



三里うり又松の並木がまきをえひて前よつてそばへ廻
は所までも入武里あらすと道平よして左の並木ぬくま
がまもものゑりてこわをゆき下せねむる野うねとれとれく
山ゆくそへ今市て前（やうねをあらはる）の松金とあらく
人多く寝て駄ワキ陣駄食人拍子ふとまく又布の衣と首
てりくの毛を市たまくへりふ生通とて別き道あつ日も日光
街通う日光ようゆそを三十四里へゆるま通う二十六里とくよ
詫望道とと道あく川くまくは今市よう日光のへに跡石乃町
二里うて並木ゆて跡くふ農家もあら道を名すす日光鷹石
詫望道とと其間字ゆるえよう日光まで都て九里と
足利ノ町と山下とあらすと東あ長く
足利學校あ
ひアトとあれまで廿二里

足利野下

門二重あり二乃門の間小桜の列樹を植くらり奥の門内ふれみ乃
御廟あり其本は海棠桜梅梅絲はうりんをあら
府廟南小向と面六間へ四間うりけりゆく松盆なり白木ばく
ありて右東階西階あり堂上木本にくわまく左た聖像仏安坐
産像うて長絶天寺又聖像乃赤左右木板曾思益乃四聖乃
神主あり堂の内は必ず蓋藍蓋豆のてく形立多有あり著拂著拂
あり神像のあら小房なり著室ありやう支神像の東は方ゆも小房
有あら信れ乃にありて其内小野寺乃神主乃神主乃
序う小野寺乃神主乃神主乃神主乃神主乃神主乃
之安利乃あられ其神主乃神主乃神主乃神主乃
憲寔再び學校を建く緑舍の因費寺より候公使と甚作也
せら候所より傍乃まきを集め又甚作也
連れゆく足利の学校も慶一々名六憲寔緑舍の全役候名

寺に学校と建て新陸の群書を以て藏先儒書を以て黒印佛書を以て卷印
す御金源文庫乃而文書紙筆を書ひ又管外源成氏至つてはより金源
も頬巣りて書籍を以てからしく御文庫も名のりゆすりそれより是
よりて追世は學校本二要初めより後方より星利の書を持て治東
一案寺本作をニ要へ頤す才祥ありて 將軍家へも伺候はせら人
云經久學は校と号には附 宮廟より植家一萬字と而寄附あは是
利の学校小姓持てる僧は深倉建長寺は傳後より今も学校と称ど
某住居傍邊立人ありと有て儒書以勒焉ば附廟本社領百石
宮廟より所寄附は聖堂と寛文年中は戸内より附達立ありと
聖廟乃東の方に引てるれど寄處あり中は正面小善院を安へ又其
西小 國初將軍北附位牌あり

学校の東隣小虛空庵寺ありえ寺坐て堂古一西の方小島山あり其民
乃滅跡ありやうと足利の所を過りては大河あり渡ら體とて行足利の

間もれ候うト序上臺の園界うりとせ山川上足利より二里半奥小
相生もれ跡あり高き縫と多く歟生と縫のをよそりて安
久次諸國へば地より出る

足利より上列深木田へ半里八本モ里を因テ一里半を因テを
本等へ三里三十町

を因る新田義貞の城なりは新田新田なりうはやみ藏山有
ありて金源より新田之城今義貞より義貞を以て居候るゝとて
胤源家始源の名家へ御とて平氏世をさりて四海のみ藏小体をも
有すれを力あく國本の傳後より金別とのいふとて向と
たるもいのちあるがゆう出来に見えず付統率新田へと義昌本也す
て室ひなめりてへり承平み承朝家にはくと年氏世をもする
もむかはれを奇先ゆかね上承者を以て年兄弟を廢じまし

筋骨よりのうとあ桑れどもて傍代の本の氣けせま
御ふ今相投たるのり承を見よ國を遠くふあはる幸國り
陽室を義をあび先帝の靈廟承すあまんとひぢり勅令が
勅をも叶ふゆじて太陽みの今直指場にくは平康を達
まきやぬひなれを松圓入道置くと深宮を山のゆ中にもひ
て彦度をうれを義名方後を先づとあく金首を仰せし
て

也幸度をけは候すとてやまと復防を守候て名月の國
せられを若葉の子供人野伏のすくふゆくせくあやふぐき
の妻官せ武身と處の勞のすひがてねむした事がれふ追
えのま附をり内士軍がてさうらるすうまくちの那乃君が
よもされをくまく生方れお伏ぞと知能力と合せんちふゆ江の妻
よりをと大會てぬつたるを承國が勢の牛にとりもく十人
まで生捕てうち取回は生捕とも承ゆうてをそく下りるを

今度あがくのうめをう幸金く傳せんあよべ勅圓慶幸
今度も拂旗を上とく御よえ令旨あてつけずすと名六波
之進の御車前成事ひ向んああく拂拂之令旨へと筆内志
してほの便をほまく官の侍在あ玉まのきとよくなれ御伏せ
左近小姓ひく甚房あらくらひと安らぐと奉らるくにばんに一人
侍の御と余はうり令旨を下すて追々せらんとてあて
十人をとるを人宮の御方へとて我あづ今やくせ相給すよ
一日あづて令旨伏せあまく拂拂之令旨を身下ふ令旨を
あて倫旨の文章に書れども其詞少く
倫旨をあて同化を發萬圓を理を序と明君乃徳歎うれと詔
わひやめうて寧まに達感を拂て移興のゆう天珠院あまく
そ四海を経むる武臣の節也頃年の間高時法陣と新朝寔伏
審本草年の宸祥が世をもんあふ怪よ一舉の義を起しん

悲感む湯、志美何ぞはくえん早く関東伝代の謀をかじし
天ト静溢の功成致まへ、者繪旨也、乃れ連岸

元弘二年二月十一日

左少輔

新田小き即處

繪旨の文車家、眉目よ便に、後編去られ、義貞斜うば様く
其望月よ虛毫して、もと幸圓今そやされる。

山の馬あの方小義重の寺あり、太光院とて、三百六十石筋く、陣
等も、宮原すと、ばりく、れ村邑不義貞の一族家、の主名をす。一
山々を、田山の林に、あり、服屋邑も、を、田乃あ本傳のゆより、藤原の、田
の、ある、ふゆう、世良田。は、田由良大、彼も、世良田と、本傳れ、同本。あり、世良田と
道の、ゆく、ふある、大村うり、大鉢も、世良田と、本傳れ、同本。あり、世良田と
中、山田も、道の側、すらう、由良も、道の、もと、がり、大井田。延に、桐川も、は
む、ふりうみふされ、義貞の一族家、の、住せ、一、生前、

日光道
今市駅

松の村
ちの村



本
上
野
下
崎

芝まで三里半十町本寄の南半里徳川より所あり松平の所先
祖 德川四郎義真れどもひし所と其役代きは地小姓一の木徳川
村高に百石あり其前の裏家はうなぬと云義真の後裔新田隼人を

り之 宮家のより知り三百石下され藤川の邊村岡あ村木居宿せしむ
或曰義真の子孫岩松万治年正和江又百石下され岩松村木居宿を
り新田乃魯之 喜木則くより芝の岡ふ行石の岡へありねそ波ふ
利根川の別まへね川うりを流す利根川とゆづふあると
五料五まぐまき里 芝と五料の間利根川あり五料の方川の波流れよふ
宮都の浦番番ありあすなみ波すむ芝と五料の間徒井町あり
波あり川有有一里を定むよつ是より既稿に四里利根川の上を赤本
山と既稿の上をよつてはる保乃沼も赤本より毛もくらす
金加聖金にて三里は同木五村とより所ありけ金加聖金より東山
道乃幸樹道あり

芝
上
野
下
料

芝
下
野
八
幡

下野 宮八幡へゆる日光初石町より今市半で武里
今市半う板橋半で武里 板橋もう庵宿下で三里六町
い同木文夾文より宿ありあれぞ秋なり
庵宿より木佐井木モ里木モ佐井佐木モ里木モ里木モ里
金借よりなの方方を里よりば惣社村あり其色ふ林あり
其内小庵庵也あ

惣
社

大明神

社社

は庵庵のあ木庵木庵庵ぬゆう小庵庵とくうう木へんううその
先ううのゆくして地と平均均と今とあがく傳傳乃木ナシ井上井方
武岡岡をうう首高高ふ枝枝生高高う高高のまうう池池もうねま高高
櫻櫻ううく立立うばえ就就ーうく其村の人あくよ高高ー今水水
なたは煙煙もねくヤスウワクもすかう

千歳 まじめを家勢へ傍見見てをはりてはのえうせす

ほれ松
お山

め古 多度つて見やすやうつてえじめのゆへはく渡アあらん

五島津浦
船

め熱れ まき水を湯士乃様大をそなえとよ富八傳もねうれぬ

足取

後古 まくよすと西ひ有へやあらんむゑの御はくうをのる

横須

日 玉井や富八あやめうすりひあまし今こををま

横須

主本 いふせん富井半はく宿とうお島のうづがをすうりん

横須

野合 いふせん富井半はく宿とうお島のうづがをすうりん

横須

日 横須のひろはすゆすりれいこひそか。まほ乃國

横須

あほましろ富の八傳やうすりけこのせうはあくえ

横須

日 地育先よう小ふみち道ううは道の壬生とよ前よちへ 富八傳

横須

日 より平柳ともよとこ庭紙通アそて様本へつる金榜より様本へり

横須

日 合戻場より様本ナセモ上里

横須

日 室の八あと合戻場乃通トアド

横須

様本より富田へ武里

橡木

富田

下

野

下

天明

下

富田より大伏モ三里
大伏と作並の門より町長し農家れ太りふらう其家宅
たと豪家ろすふやすと小石樹多く植えり町の間の通り也
鄙少先レしき寺森うる町からこれより半里もう少佐
聖總理を支の城給わ

大伏より天明まで半里は同大畠町境をあう長く寺森も

町へ中モ處一又裏町もあら町の内玉屋宮とて高木本に社

ありは地の生玉森うる裏町よ通翁よう裏町よ寺あわ

健者破河乃久能ゆう日光山へ移りまく玉森はす

二看守退るうる乃よけすと御佐牌ゆう寺外立石なりけり
今之段凡ゆう五百石をうちも有りとよ天明モソリ

今之段凡ゆう五百石をうちも有りとよ天明モソリ

兼谷村西へ天明峯とて飯赤峯合せば、ほどく至て名あらず
大伏山と立山とも標記す。天明より鍛林まで御室山に鍛林を
川股まで里半川股にて式列。忽まで三里鍛林の峰城天和三子
七月廿日わざも又氣水に奉事。馬び草すたまよ

天明より深田まで武里半

笠利へ行ひ深田へゆく

天明より右の方へ行ひ天明より笠利へ三里半ゆき笠利よりを田と
望みかうけ道と墨田八木瓜通へて天明より笠利へ行ひそなむり
を田へ出る丸毛里經達へ天明よりそ里を笠利のうちアリく
上列沿田へゆく道あり天明より沿田まで翠二里あり沿田を
笠利坂川より上りてうさんむりへ。高岡安房守信列上田より笠利
折えり今も城なり。日光山乃うぬきう若狭を前とて御室山に笠利
よりを新田よりも坂面へ行ひあらう川みほそそのうりと

栗田下
哥

本居宣平

笠利より深田室八百天明がさきを被く興原氏の
遺稿がさくふせんかく

二ふ山

佐藤

ト並山内郡ふあく

安
模川

船

ト並山内郡ふあく

船十

名ふす安模のあらぶり舟くはう舟ふうの泊ら年

蓮生法師

